

市 用 遺 跡

— 県道白丹竹田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007年3月

大分県教育庁埋蔵文化財センター

市 用 遺 跡

2007年3月

大分県教育庁埋蔵文化財センター



市用全景



SK003出土須恵器 甕



SC008出土石製紡錘車



SC024出土管玉



台形榿石器

序 文

本書は、大分県教育委員会が県道白丹竹田線道路改良工事に伴い、大分県竹田市木事務所の依頼を受けて実施した竹田市大字市用に所在する市用遺跡の発掘調査報告書です。

竹田市は九州山地の中央部に位置し、周囲を阿蘇・久住・祖母の山々に囲まれる山紫水明な地で、また、市内には国指定史跡である七ツ森古墳群や岡城跡をはじめ数多くの遺跡が所在する古い歴史を持つ地域です。

今回調査した市用遺跡は、竹田市西部を流れる大野川支流の稲葉川右岸の丘陵上にあり、ここでは古墳時代後期の集落を中心とした遺跡が発見され、この一帯の歴史を解明する上で貴重な成果を得ることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護及び地域の先人の生活を理解する資料として、さらには、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心より感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 小玉学司

例 言

- 1 本書は平成17年度に実施した県道白丹竹田線道路改良工事に伴う市用遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大分県教育庁埋蔵文化財センターが大分県竹田土木事務所の委託を受け実施した。
- 3 遺跡・遺構の実測は調査担当者の甲斐寿義・吉田朋史・権藤聡子が行った。遺物の実測及びトレースは大分県教育庁埋蔵文化財センターで行い、遺物写真は甲斐による。
- 4 遺構写真は甲斐・吉田によるが、空中写真は、株式会社九州航空に委託した。
- 5 本書で用いた方位はすべて座標北である。座標値については日本測値系4系の数値を記している。
- 6 本書で使用する遺構略語は、以下の通りとする。

SC：堅穴遺構 SD：溝状遺構 SK：土坑 SP：柱穴

- 7 本書で使用した須恵器の編年は田辺編年を使用し、実年代については以下の須恵器実年代比較表を使用した。

実年代(西暦)	500年				600年			
田辺編年	田辺編年	MT15	TK10	MT85	TK43	TK209	TK217	TK46
小田編年	小田編年	Ⅱ期	Ⅲ-A期		Ⅲ-B期	Ⅳ期	Ⅴ期	

高橋・小林「九州須恵器研究の罪題」古代文化第42巻第4号参照

- 6 本遺跡の出土遺物並びに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
- 7 本書の執筆及び編集は、甲斐が行った。

目 次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	1

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	1～3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要と方法	4
第2節 層序	4
第3節 遺構と遺物	7～37
(1) 旧石器時代の遺物	7～8
(2) 縄文～弥生時代の遺物	8～15
(3) 古墳時代の遺構・遺物	16～35
(4) その他の遺構	36

第4章 まとめ

	37～39
--	-------

附 篇

玉来横穴墓群	43～44
--------	-------

図 版 目 次

第1図	市用遺跡と周辺の遺跡……………	2	第27図	市用遺跡S C011カマド実測図……………	23
第2図	” 周辺地形図……………	3	第28図	” ” 出土遺物実測図……………	24
第3図	” 調査区位置図……………	4	第29図	” ” S C012出土遺物実測図……………	25
第4図	” 遺構配置図及び土層図……………	6	第30図	” ” S C013出土遺物実測図……………	25
第5図	” ” 出土旧石器……………	7	第31図	” ” S C013集石実測図……………	25
第6図	” ” 縄文土器1……………	9	第32図	” ” S C014出土遺物実測図……………	25
第7図	” ” 縄文土器2……………	10	第33図	” ” S C016実測図……………	26
第8図	” ” 縄文土器3……………	11	第34図	” ” 出土遺物実測図……………	26
第9図	” ” 縄文・弥生土器……………	12	第35図	” ” S C017～019実測図……………	26
第10図	” ” 出土石器1……………	13	第36図	” ” S C020実測図……………	27
第11図	” ” 石器2……………	14	第37図	” ” S C020出土遺物実測図……………	27
第12図	” ” 石器3……………	15	第38図	” ” S C021実測図……………	28
第13図	” ” S C001実測図……………	16	第39図	” ” S C022実測図……………	28
第14図	” ” S C002実測図……………	16	第40図	” ” 出土遺物実測図……………	28
第15図	” ” 出土遺物実測図……………	17	第41図	” ” S C023実測図……………	29
第16図	” ” S C003実測図……………	17	第42図	” ” S C024実測図……………	29
第17図	” ” 出土遺物実測図……………	18	第43図	” ” 出土遺物実測図……………	30
第18図	” ” S C004～006実測図……………	18	第44図	” ” S C025実測図……………	31
第19図	” ” 出土遺物実測図……………	19	第45図	” ” カマド実測図……………	31
第20図	” ” S C007実測図……………	19	第46図	” ” 出土遺物実測図……………	32
第21図	” ” 出土遺物実測図……………	19	第47図	” ” S C026実測図……………	33
第22図	” ” S C008実測図……………	20	第48図	” ” 土坑実測図……………	34
第23図	” ” 出土遺物実測図……………	21	第49図	” ” S K003出土遺物実測図……………	35
第24図	” ” S C009・010実測図……………	22	第50図	” ” 一括遺物実測図……………	35
第25図	” ” 出土遺物実測図……………	22	第51図	” ” 柱穴出土遺物実測図……………	36
第26図	” ” S C011～015実測図……………	23	第52図	” ” S D001・002実測図……………	36

表 目 次

第1表	新旧遺構番号対比表……………	5	第4表	” ” 石製品観察表……………	42
第2表	市用遺跡出土土器観察表1……………	40	第5表	市用遺跡出土鉄器観察表……………	42
第3表	市用遺跡出土土器観察表2……………	41	第6表	市用遺跡出土石器観察表……………	42

写真図版目次

PL1	市用遺跡出土石器……………	45	PL5	市用遺跡 全景……………	49
” 2	” ” 縄文・弥生土器……………	46	” 6	” ” 遺跡検出状況……………	50
” 3	” ” 須恵器……………	47	” 7	” ” ………………	51
” 4	” ” 土師器・鉄器……………	48	” 8	” ” ………………	52
			” 9	” ” ………………	53

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

県道白丹竹田線は大分県西部の竹田市に位置する。この路線は竹田市街地と旧久住町白丹（現 竹田市久住町白丹）を結ぶ地域生活道路として重要な役割を担ってきたが、路線が山間部や川沿いの地区を通るため幅員が狭く、また屈曲した道路部分が多いため、近年、通行量が増大するにつれ生活道路としての機能が低下してきた。そのため県土木建設部は、地域住民の生活利便性の向上を目指すとともに地域の基幹産業である農業の振興を図るため、一般県道白丹竹田線道路改良工事を計画し、事業を着手した。

大分県教育委員会では、この道路改良工事計画に伴い、計画区間内において用地買収が終了し、試掘調査が可能となった時点で、竹田土木事務所から埋蔵文化財の有無・範囲・状態等の確認のための分布調査依頼を受け、遺跡推定地については試掘を行うことになった。1998年度には炭電工区（炭電遺跡）で本調査を実施している。

今回の調査は、2004年度に用地買収が終了した個所で、大分県埋蔵文化財センターでは竹田土木事務所より分布調査の依頼を受け実施したところ、当該地が周知遺跡である市用遺跡内に位置するため、2004年12月に遺跡の確認調査を実施することになった。

調査の結果、遺構を確認したため、大分県教育庁埋蔵文化財センターは土木建築部と協議を進め、2005年度に市用遺跡の本調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

市用遺跡は稲葉川右岸の河岸段丘上の水田跡に位置する。2004年確認調査を実施したところ、古墳時代の須恵器を中心とした遺物が出土し、また、隣接する水田では竹田市が圃場整備事業に伴う調査を行い、古墳時代後期の集落跡を確認していることから、本調査区内にも古墳時代の住居跡が展開している可能性が高く、本調査を実施することになった。

本調査は、2005年11月1日に開始した。まず、バックホウで表土を除去後、グリッドを設定し、丁寧に遺構検出を行い、全体の遺構分布を確認した後、調査区北側から順次遺構の掘下げを行った。しかし、道路幅が狭い上に予想以上に住居跡の密度が高く、複雑に切り合っていたため、平面での遺構プラン検出に時間を要し、また12月～1月にかけては、霧と雪のために調査に困難をきたしたが、2006年1月12日には空撮を実施し、翌13日に調査を終了することができた。

第3節 調査組織の構成

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育委員会教育長	深田秀夫
	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	渋谷忠章
	同 調査第一課長	栗田勝弘
	同 主幹	甲斐寿義（調査担当）
	同 嘱託	吉田朋史（調査担当）
		権藤聡子（調査担当）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

市用遺跡は大分県竹田市大字市用に所在する（第1図）。竹田市は、大分県の南西部に当たり、熊本県・宮崎県と境を接している。北には久住連山、南には祖母・傾山系、西には阿蘇五岳を望む。この一帯は、大野川上流域に当たり、阿蘇山と久住山からの堆積物による溶結凝灰岩によって形成された丘陵を大野川が侵食し、多数の台地が形成されている。市用付近は大野川の支流である稲葉川沿いに位置し、稲葉川が形成する谷の河岸段丘に当たる。この地区の現状地形は谷あいには展開する水田区域で、標高は約320mを測り、2004年には圃場整備が行



1	市用遺跡	2	市用横穴墓群	3	横埋遺跡	4	南光寺遺跡	5	下村遺跡
6	塩付遺跡	7	塩付横穴墓群	8	平原遺跡	9	鬼森遺跡	10	紙漣遺跡
11	地藏原遺跡	12	六麦遺跡	13	岩瀬遺跡	14	岩瀬岩陰	15	鶴原横穴群
16	深瀬遺跡	17	大津留遺跡	18	柱立神社遺跡	19	穴井迫第2遺跡	20	穴井迫第3遺跡
21	騎群城跡	22	岡城道(肥後街道)	23	玉来横穴墓群				

第1図 市用遺跡と周辺の遺跡 (1/25000)

われている。

第2節 歴史的環境

稲葉川流域には、市用地区のように水田を取り巻く集落形成が上流域から下流域にかけていくつもみられる。この区域は、水田の少ない竹田市においてある程度まとまった水田が見られる場所である。この稲葉川流域から竹田市久住町にかけては発掘調査の空白地帯であったが、1995年以降、圃場整備に伴う発掘調査が増加するにつれ、この一帯の歴史が明らかになってきた。

まず、旧石器時代であるが、本遺跡の西部に位置する菅生台地では小園遺跡などでわずかに旧石器が出土した例があるが、稲葉川流域ではまだ確認されていなかった。しかし、本報告のように市用遺跡では旧石器が出土し、この流域にも旧石器時代の遺跡が点在する可能性が高く、今後、報告数が増加するものと思われる。次に縄文時代であるが、稲葉川流域では、市用遺跡の対岸である城原地区の地藏原遺跡・紙漉遺跡などが知られていたが、さらに上流域の炭竈遺跡でも、縄文時代早期、前期、後期の遺物が出土するなど次第に縄文時代における稲葉川流域の様相が明らかになりつつある。なお、炭竈遺跡では早期のコブ付土器が出土し注目される。弥生時代になると、菅生台地では石井入口遺跡など大規模な集落遺跡が出現するが、稲葉川流域では、炭竈遺跡で弥生時代後期の竪穴住居が確認されているだけである。発掘調査例が少ないことも関係しており、この一帯の圃場整備に伴う発掘調査が進めば、さらに増加するものと思われる。古墳時代になると、前期の遺跡は確認できていないが、後期になると、水田区域を望むように市用横穴墓群・南光寺横穴墓群・下原横穴墓群・成泊横穴墓群・宇土古墳・舟ノ辻古墳などの古墳群が形成される。この動きは、この時期に菅生台地において遺跡数が激減することと連動した様子が伺え、台地上から川沿いの谷部に生活の中心が移行したことを伺わせるものである。



第2図 市用遺跡周辺地形図 (1/750)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の概要と方法

調査対象地は南北に約80m、東西約6m、面積は約500m²である。調査前の状況は圃場整備後の水田跡地であり、南側隣接地は、2004年度に竹田市が圃場整備に伴い調査を実施し、古墳時代後期の集落跡を確認している。

調査は、まず重機による表土剥ぎを実施した後、手作業による遺構検出を行い、国土座標を基に調査区内を10m×10mに区画し、それぞれに番号をつけた。また、遺物については、基本的に遺構毎に番号を付けて、取り上げることとしたが、包含層から出土したものについては調査区番号で、その他は一括で取上げることにした。遺構は、現場段階では遺構の性格を示す番号をつけず、すべてS(サト)―〇〇といった通し番号で扱い、報告書段階で遺構の性格を示すものに変更することにした(第1表)。

調査については、遺構検出を行い、遺構分布を把握した後に、北側から掘り下げを開始する予定であったが、調査区の幅が狭いうえ堅穴遺構の密度が濃く、切り合いも複雑であったため、検出と遺構の掘り下げを同時に行うことになり、結果的に遺構番号が前後する状況が生まれた。

第2節 層序

本遺跡の層序であるが、斜面を削平した北側部分を除くと、調査区内の大半が後世の開発のため削平され、表土下はアカホヤの二次堆積層であった。遺構はいずれもこのアカホヤの二次堆積層で確保されたが、これは後世の開発により上層が削平された結果であり、本来は竹田市菅生台地の層序に近く、黒色土層が存在した可能性が高い。以下、模式図で基本層序を説明する。

I層・・・表土。耕作土及び水田基盤層。厚さ約30cm。

II層・・・アカホヤ火山灰の二次堆積層

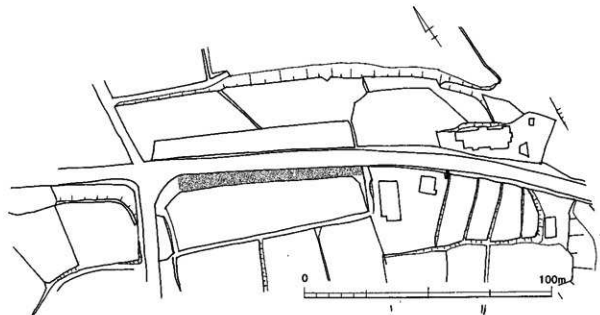
III層・・・アカホヤ火山灰のブロックを含む層。厚さ約20cm。

IV層・・・暗茶褐色砂質土層。厚さ約30cm。

V層・・・暗赤褐色砂質土層。

IV層・V層からは遺物は出土していない。また、これらの層は砂質であることから稲葉川の氾濫等の影響を強く受けたものと思われる。なお、砂質土層が厚く本遺跡内ではローム層までは確認できなかった。

I層
II層
III層
IV層
V層



第3図 市用遺跡調査区位置図 (1/1500)

第1表 新旧遺構番号対比表

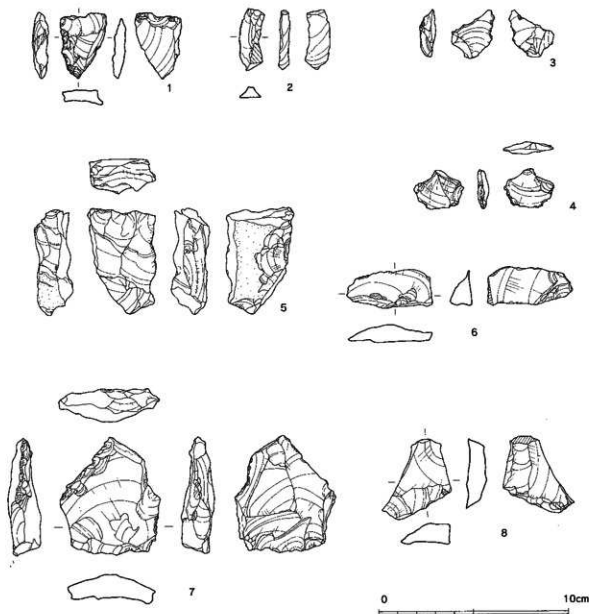
本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	時 期	出 土 遺 物	備 考
SC001	S050	竪穴遺構	不明		
SC002	S003	竪穴遺構	6世紀後半?	須恵器坏身・土師器甕・壺	
SC003	S005・006	竪穴遺構	6世紀後半?	須恵器坏身・甕・高坏・土師器甕・壺・高坏	
SC004	S007	竪穴遺構	不明	須恵器坏身	
SC005	S008	竪穴遺構	不明	土師器甕	
SC006	S009	竪穴遺構	不明		
SC007	S011	竪穴遺構	不明	須恵器甕・土師器甕・高坏	
SC008	S012	竪穴遺構	6世紀後半	須恵器高坏・埴瓶・土師器甕・高坏・紡錘車	
SC009	S016	竪穴遺構	不明		
SC010	S048	竪穴遺構	6世紀後半?	土師器甕・甕・鉄鍬	
SC011	S014	竪穴遺構	6世紀後半	須恵器坏身・甕・高坏・土師器甕・高坏・刀子	カマド付設
SC012	S018・S013	竪穴遺構	不明	須恵器甕	
SC013	S019	竪穴遺構	不明	須恵器高坏・土師器甕	
SC014	S013	竪穴遺構	不明	土師器甕	カマド付設
SC015	S032	竪穴遺構	不明		
SC016	S017	竪穴遺構	6世紀後半	土師器甕	
SC017	S015	竪穴遺構	不明		
SC018	S034	竪穴遺構	不明		
SC019	S030	竪穴遺構	不明		
SC020	S029・S102・S105・S105	竪穴遺構	不明	須恵器坏蓋・坏身・土師器甕・移動式カマド	カマド付設
SC021	S025・S101	竪穴遺構	不明	土師器甕	
SC022	S023	竪穴遺構	6世紀後半	須恵器甕・土師器甕・甕	
SC023	S024	竪穴遺構	不明		
SC024	S021・S112・S113・S114	竪穴遺構	6世紀末～7世紀初頭	須恵器坏身・甕・土師器甕・甕・管玉	
SC025	S033	竪穴遺構	6世紀後半	須恵器坏身・甕・土師器甕・高坏	カマド付設
SC026	S049	竪穴遺構	不明		
SK001	S010	土 坑	6世紀後半		
SK002	S104	土 坑	＃		
SK003	S035	土 坑	5世紀後半	須恵器甕	
SK004	S036	土 坑	＃?		
SK005	S037	土 坑	＃?		
SK006	S038	土 坑	不明		
SD001	S001	溝	不明		
SD002		溝	不明		

第3節 遺構と遺物

本遺跡からは、古墳時代の集落跡やそれに伴う遺構・遺物、旧石器時代～弥生時代にかけての遺物などを検出した。以下、旧石器時代の遺物から説明を加えていくが、旧石器時代～弥生時代の遺物についてはいずれも古墳時代の遺構覆土内からの出土であるため、一括して説明を加える。また、古墳時代については基本的に堅穴遺構・土坑の順に調査区西側から説明を加えるが、出土地点が明確でない遺物や時期不明の遺構については、その他の遺構・遺物として最後に一括して説明を加えることとする。

(1) 石器時代の遺物

本遺跡では8点の旧石器が出土している。いずれも古墳時代の遺構の覆土に含まれていたものであり（第6表）、プライマリーな状態での出土ではない。本遺跡では旧石器の包含層は確認できていないことや、出土地点が西に片寄っていること、また隣接する小丘陵ではローム層が確認できることからこれらの遺物は西側小丘陵から流れ



第5図 市用遺跡出土旧石器 (1/2)

込んだ可能性が高いと思われる。

1は台形椀石器である。素材剥片の基部部分を切断し、石器を製作する。石材は硬質安山岩であり、切断した上縁と未加工部分の縁は直行する。2・5・6・8は剥片で、石材は2・8が流紋岩、5・6はチャートである。2は縦長剥片で、5～7には使用痕が認められる。3はナイフ形石器である。石材は腰岳産の黒曜石で、左側面を加工し形を整え、縁辺の右側を刃部として残す。4は石核である。石材は流紋岩である。打面を成形し、正面や左右側面から縦長剥片を剥離している。裏面には自然面が残る。7はスクレイパーである。石材はチャートで、主要剥離面の左側に斜行する刃部を形成する。

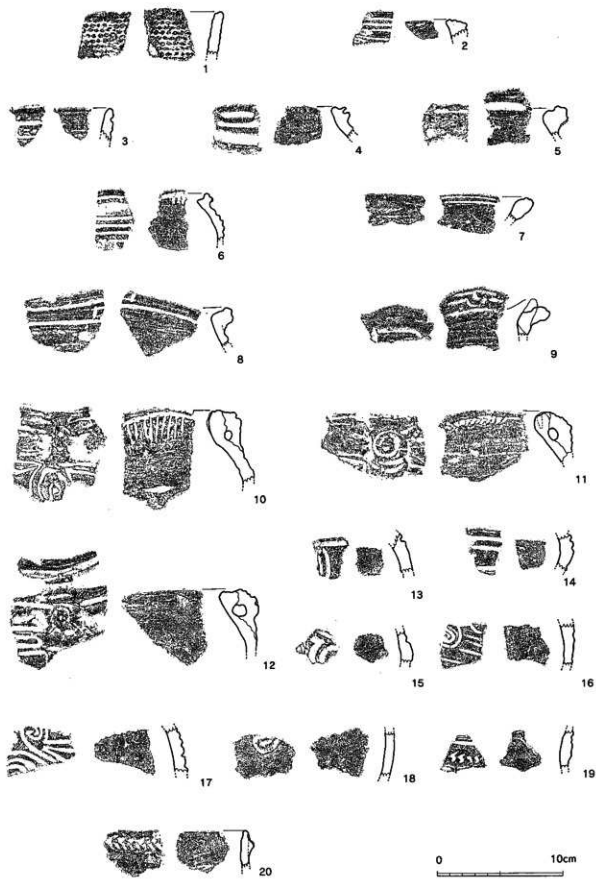
(2) 縄文時代～弥生時代の遺物 (第6～8図)

本遺跡からは、旧石器時代の遺物と同様に、竪穴遺構や溝状遺構から早期の押型文土器や後期の磨滑縄文土器などの縄文土器が102点と、若干の弥生土器が出土した。いずれも遺構に伴うものではなく、古墳時代の遺構の覆土から出土している(第6表参照)。遺構は確認できなかった。以下、出土した遺物の中で図示できるものについて説明を加える。

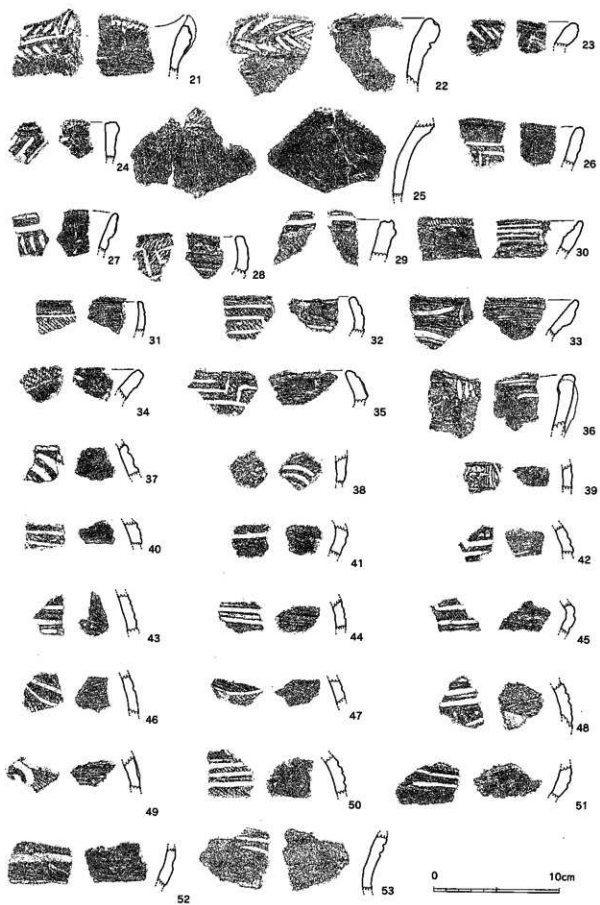
縄文時代の土器

1は調査区西端のSC001の覆土から出土した押型文土器の口縁部片である。口縁部が直線的に立ち上がり内・外面に楕円文が施されるタイプである。胎土に長石、角閃石や砂粒を含む。2～70は縄文時代後期前葉～中葉にかけての土器である。2はSC002から出土した福田K2式土器の口縁部である。拡張した口唇部の文様帯に3本の沈線が巡る。角閃石、白色粒を多く含んでいる。3～18は調査区西側から中央にかけての遺構より出土した鐘ヶ崎式土器群である。3～12は口縁部で、5・6・8は端部を肥厚、9は「く」の字状に外反させ、口唇部の文様帯を形成している。この文様帯には沈線が施され、6には刻み目が、9には入組渦文を施す。6には赤色顔料が付着する。10～12は橋状把手部分である。把手には渦文が施され、10・12の渦文中央は刺突される。いずれも口縁端部には沈線を巡らす。10は口縁端部から内面に向け、11は端部にヘラ状工具による刻み目が施され、11は端部に刺突痕も残る。13～18は胴部片で、沈線による文様が施され、沈線の間には縄文が充填される。15～17は沈線によるステッキ状モチーフの鉤手部分である。18・19はいずれも調査区中央付近の遺構から出土した南九州系の土器である。19は口縁部付近で沈線間には巻貝による刺突文が並ぶ。20は口縁部である。端部付近に突帯を巡らし、口縁端部外面から突帯上部にかけて、単斜線文が施される。施文状況から北久根山式系土器の可能性もある。21～52は主にSC008の覆土から出土した土器群である。21～36は口縁部片で、21～25は口縁部に施文帯を持ち、短斜線文が施される北久根山式土器、26～35は、口縁部の磨滑縄文が直線的なモチーフを形成する土器群で、北久根山式に併行する一群である。30の内面には沈線が巡り、端部外面には刻目が施される。36は口縁部に短斜線文が施される。37～53も主にSC008の覆土内から出土した胴部片で、文様が簡略化され直線的なモチーフとなる一群である。北久根山式土器及び北久根山式に併行する土器群であろう。54～66は口縁部と胴部に縄文調整が残る土器群で地縄文と呼ばれるものである。いずれも調査区西側中央にかけての遺構から出土した。54～59は口縁部で54には巻貝による擬縄文が施される。60～66は胴部片で縄文が施される。67～72は内・外面ともに放射射のある二枚貝等で器面調整した無文条痕文土器片である。鐘ヶ崎式土器に並行するものであろう。72は平底の底部である。底部から外面にかけて磨きが施される。73・74は後期の浅鉢の口縁部片である。いわゆる黒色磨研土器で内・外面共に丁寧なミガキが施される。75は縄文晩期の甕の底部片であろう。底部外面に突帯を巡らし底面を形成する。

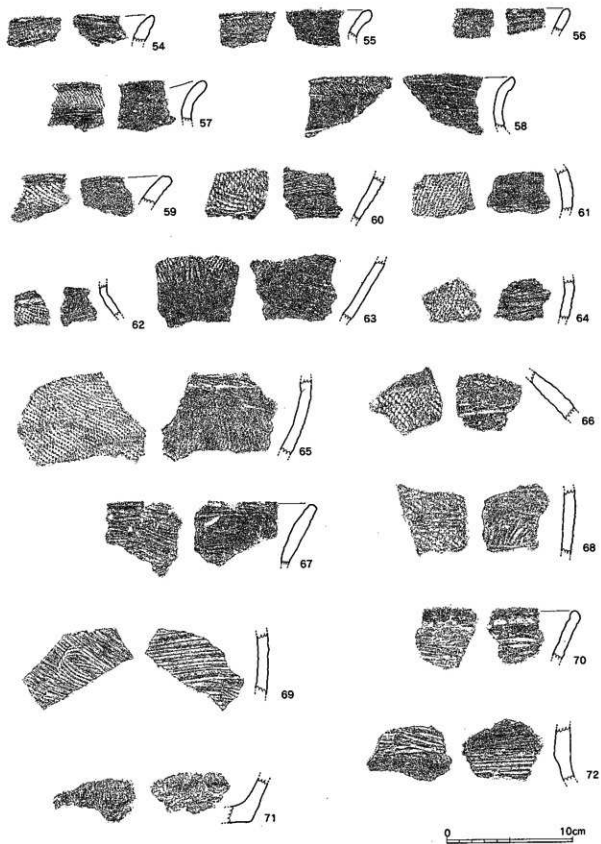
76～78は弥生土器である。76・77は甕形土器で、76は口縁下位に突帯を巡らせ、口縁端部外面と突帯にヘラ状工具で刻み目を施す、いわゆる下城式土器の甕である。77は条痕調整をした後ナデ仕上げを行い、口縁下位に突帯を巡らしヘラ状工具で刻み目を施す。いわゆる刻目突帯文土器である。78は肥後系の甕で、口縁外面に断面が三角形の突帯を巡らし、口縁部を形成するため内側への突出は認められない。胴部上位に沈線が巡り、胎土に石英を多量に含む。



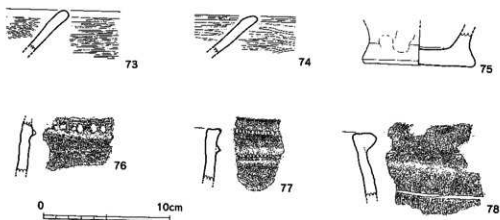
第6圖 市用遺跡出土縄文土器1 (1/3)



第7圖 市用遺跡出土縄文土器2 (1/3)



第8図 市用遺跡出土縄文土器3 (1/3)



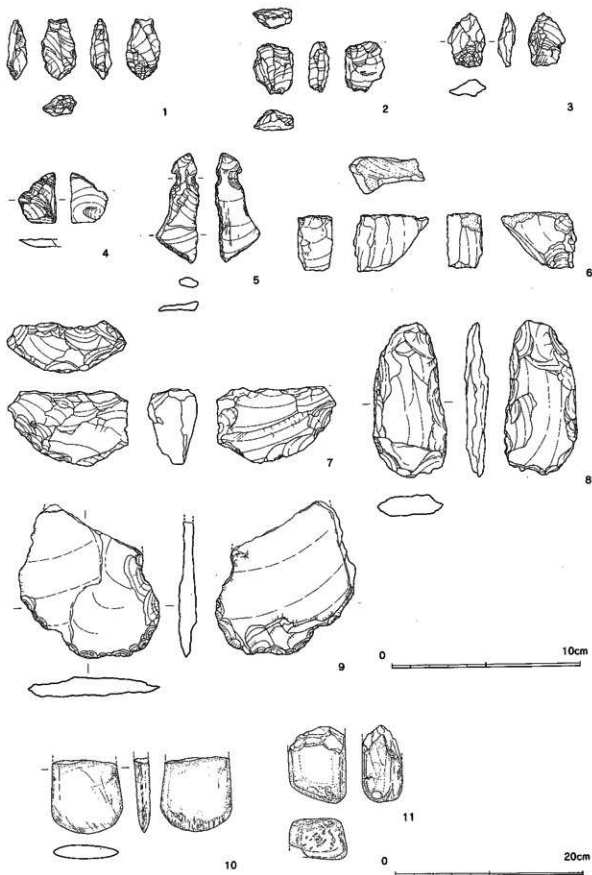
第9図 市用遺跡出土縄文・弥生土器 (1/3)

(3) 石製品・石器 (第10図～第12図)

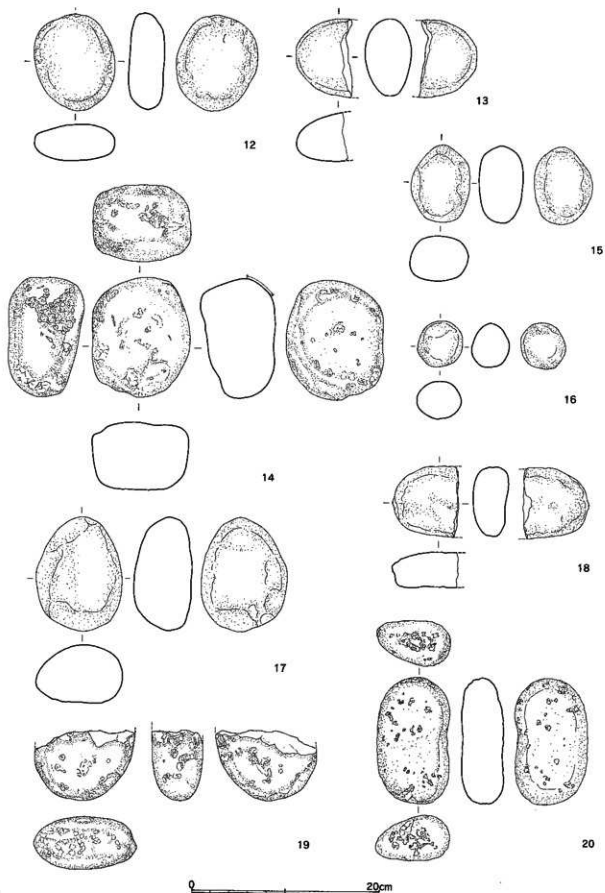
1～11は縄文時代の石器である。旧石器同様いずれも遺構の覆土から出土した。1・2は早期のくさび形石器である。上下両端からの剥離痕が認められる。石材は、1は姫島産黒曜石、2はチャートである。3は石鏃の未製品である。石材はチャート。4は剥片である。姫島産黒曜石で使用痕が残る。5は石匙である。石材はサヌカイトで、刃部が縦に長い縦型である。上部に抉りのあるつまみ状の突起を有し、左右側面と底面に刃部を形成する。6・7は流紋岩の石核である。6は自然面を打面とし左側面を作業面としている。8～10は縄文後期石斧で、8・9は扁平打製石斧、10は磨製石斧である。8・9は素材の縁辺に剥離を加えて刃部を形成し、8は上端部を欠損している。石材は8が緑泥片岩、9は輝石安山岩である。10は硬質砂岩製で刃部だけでなく全体を研磨して仕上げる。上端部を欠損している。11は硬質砂岩製の機器である。自然面にも敲打痕が残ることから敲石としても利用されたことがわかる。

12～21・23・24・26は磨石、22・25は窪石、27・28は砥石である。いずれも遺構の覆土から出土した。磨石の材質は安山岩が多く、13・18・24は一部を欠損する。大半が敲石と磨石の兼用品である。窪石も安山岩の円礫を使用し敲石との兼用が多い。27の石材は結晶片岩で、4面に使用痕が残る。また両端には敲打痕が残っていることから砥石としての役割が終了した後に敲石として利用されたことがわかる。28は粘板岩製で二面に使用痕が残る。

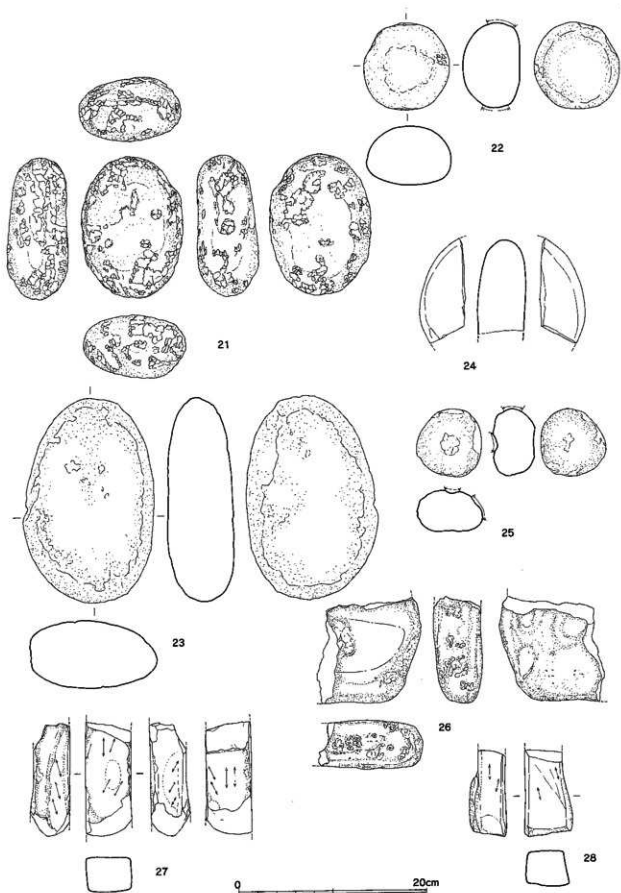




第10圖 市用遺跡出土石器1 (1/2 · 1/4)



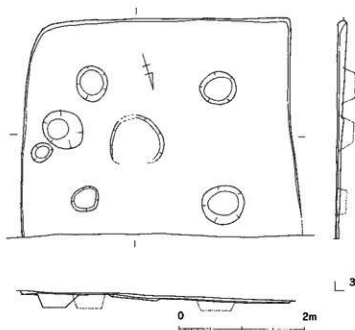
第11圖 市用遺跡出土石器2 (1/4)



第12圖 市用遺跡出土石器3 (1/4)

(3) 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構としては、竪穴遺構は26基、土坑6基、遺物は須恵器や土師器、鉄器、玉類、石製の紡錘車等が出土した。調査区西側から遺構毎に説明を加えていく。



第13図 市用遺跡SC001実測図(1/60)

1号竪穴 (SC001) (第13図)

調査区西端の遺構である。調査終了間際に確認した遺構のため、調査時にS050と遺構番号を設定した。A2区に位置し北側が調査区外へと続く。大きく削平され、床面も残存せずわずかに竪穴の掘方が残存する程度である。4本柱の方形竪穴であり、柱穴の掘方は直径が0.45m～0.68m、深さは0.18m～0.22mを測る。中央には直径が約0.8mの土坑が掘り込まれる。最も広いところで主軸をとると主軸方位はN-71°-Wである。竪穴の時期を示す遺物は出土していない。

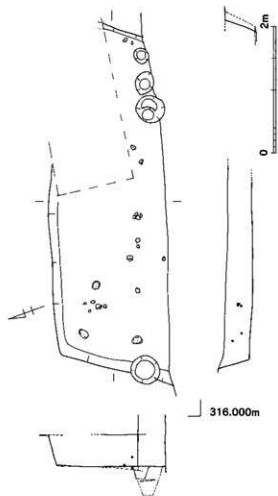
315.700m

2号竪穴 (SC002) (第14図)

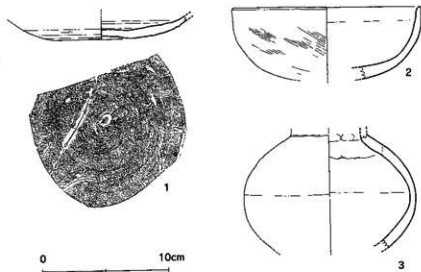
調査区西側B3区南よりに位置する。遺構の南側が調査区外へと続き、北側がSK003と重複する。試掘トレンチにより重複部分が破壊されたため、切り合い関係は不明である。プランは残存状況から方形を呈する可能性が高く、南北に約5.3m、検出面から床面まで約0.4mを測る。主柱穴は1本確認でき、掘方の直径・深さともに約0.45mを測る。遺物は少なくいずれも床面から浮いた状態で出土しており、明確に時期を示す遺物は確認できなかった。

出土土器 (第15図)

1は須恵器の坏身底部片である。ヘラ切り離した後、回転ヘラ削りが施される。2は土師器の坏である。口縁は直線的に立ち上がり、端部はやや反しながら丸く収まる。内面は横ナデ後ナデ調整が、外面はハゲ目調整後ナデが施される。胎土に石英を多く含む。3は直口壺の胴部である。内・外面ともにナデ仕上げであるが、外面は丁寧なナデを施す。外面には黒斑が認められる。



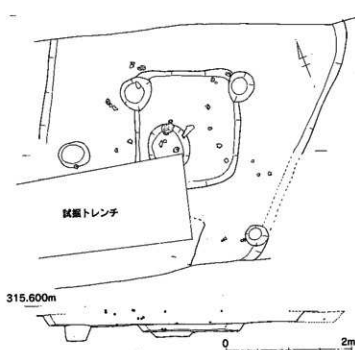
第14図 市用遺跡SC002実測図(1/60)



第15図 市用遺跡SC002出土遺物実測図(1/3)

3号竪穴 (SC003) (第16図)

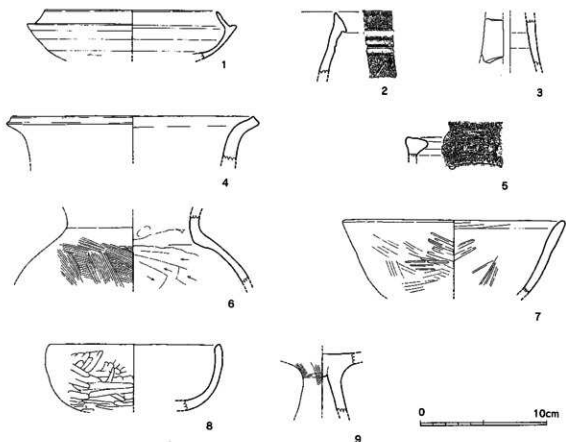
調査区西側のA・B3区に位置する。調査時には中央の二段掘りの部分をS006として調査したが、調査後の状況から同一の遺構の可能性が高いと判断し、同一の遺構として報告することにした。北側は調査区外へと続き、南側でSC003と重複する。プランは、東壁がやや歪む不規則な方形のプランを呈するものであろう。長軸約4.7m、検出面から床面までの深さは0.15mを測る。床面は二段掘りで、長軸1.9m、短軸1.7m、深さ約0.15mを測り、隅丸方形を呈す。東壁内側両端に主柱穴が2本配され、掘方の直径は0.5～0.52m、深さはともに約0.45mを測る。主軸方位N-70°-W。二段目南側やや西よりは短軸約0.65mの炉跡が存在する。遺物はいずれも床面から浮いた状態で出土し、明確に時期を示す遺物は出土しなかった。



第16図 市用遺跡SC003実測図(1/60)

出土土器 (第17図)

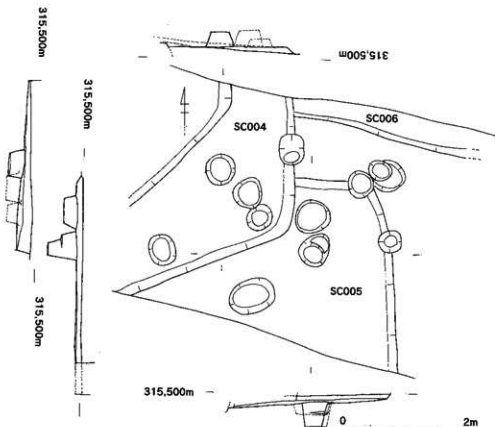
1～3は須恵器である。いずれも小片で、覆土から出土したものである。1は坏身で、口縁部はやや内傾して短く立ち上がり、短部は丸く収まる。外面にはヘラ削りが施される。2は甕の口縁部片である。口縁下位に櫛描波状文が施される。3は高坏の脚部片で、透かしを有す。4～9は土師器である。4・5は甕の口縁部片で、4の口縁は外反し端部には面取りが施される。5は三角形の粘土紐を端部に貼り付け口縁部を形成する。口縁端部には刻み目が施されていて、形状から肥後系の弥生土器であろう。外面にスガが付着している。6は甕の胴部片である。内面はヘラ削りが、外面にはハケ目調整後ナデが施される。8は壺である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はやや外反し丸く収まる。外面はヘラミガキが施される。9は高坏の脚部片である。



第17図 市用遺跡SC003出土遺物実測図 (1/3)

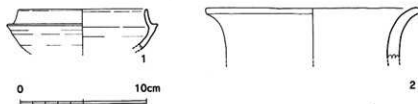
4・5・6号竪穴
 (SC004・005・006)
 (第18図)

調査区西側B3・4区、SC003の東側に重複するように位置する。SC004はSC005を切るように存在し、北・南部分は調査区外へと続く。残存状況から方形のプランを呈するもので、検出面から床面までは0.1m～0.25mで南側へと下る。主柱穴は1本確認でき、掘方の直径は約0.45m、深さ0.25mを測る。遺物は床面から浮いた状態で若干出土しており、時期を明確に示すものは確認できなかった。



第18図 市用遺跡SC004・005・006実測図(1/60)

SC005は南側が調査区外へと続く。西側はSC006により切られる。床面は東側へとやや下り、検出面から0.15mを測る。残存状況から方形のプランを呈するもので主柱穴は

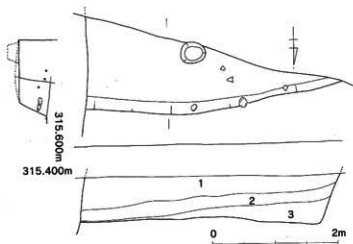


第19図 市用遺跡SC004出土遺物実測図 (1/3)

1本確認でき、掘方の直径は約0.55m、深さ0.4mを測る。SC006は調査区北壁に沿って検出され、西側をSC004によって切られる。プランは不明である。

出土土器 (第19図)

1・2はSC004から出土した土器である。1は須恵器坏身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は丸く収まる。2は土師器の甕の口縁部片である。口縁部が外反するタイプである。



第20図 市用遺跡SC007 実測図 (1/60)

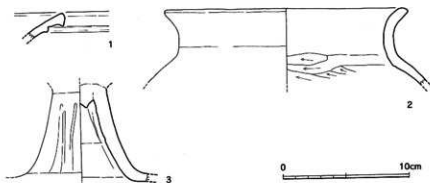
7号(竪穴SC007) (第20図)

調査区西側B4区に位置する。東側をSC008に切られる。南側が調査区外へと続いており、プランは不明である。検出面から床面までは0.67mを測り、主柱穴は1本確認できる。主柱穴の掘方の直径は約0.4m、深さ約0.2mを測る。覆土内では若干の遺物は確認したが、床面では確認できなかった。覆土の堆積は3層が西から東へと傾斜する状況が認められた。

- 1 暗褐色土 (赤色粒、炭化物を若干含む。きめ細かくしまりはない。)
- 2 暗褐色土 (黄褐色ブロックや赤色粒、炭化物を含む。)
- 3 暗黄褐色土 (黄褐色のブロックを含む層と暗黄褐色ブロックが互層となっている。)

出土土器 (第21図)

1は須恵器甕の口縁部片である。大きく外反する口縁部で、口縁部直下に断面三角形の突帯を巡らす。内面には自然軸がかかる。2・3は土師器である。2は甕で、口縁部がやや外反し、内面にはヘラ削りが施される。3は高坏の脚部片である。内面にはヘラ削りが施される。



第21図 市用遺跡SC007出土遺物実測図 (1/3)

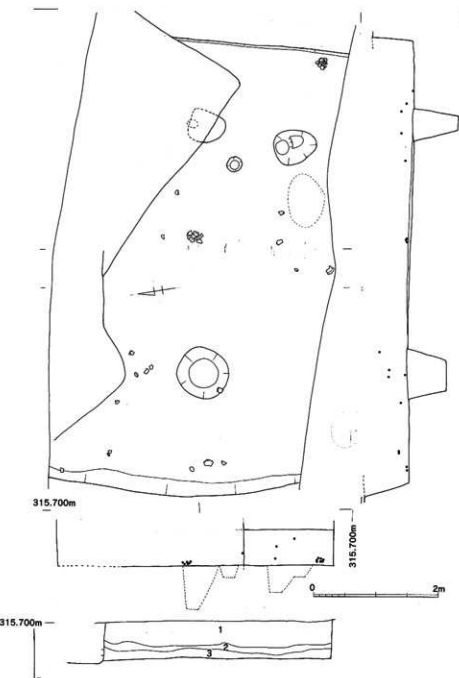
8号竪穴 (SC08) (第22図)

調査区中央B4・5区に位置する。北側をSC009・010・016に切られる。住居南北両端が調査区外へと続いており、検出面から床面までの深さは0.73mを測る。調査区では最大面積の竪穴で主柱穴は3本確認でき、掘方の直径は約0.6m～0.8m、深さ0.4～0.65mを測る。主軸方位はN-84°-W。床面から復元できる土師器壺を2点検出したが、出土遺物に須恵器蓋環が含まれていない。覆土は3層ある。

- 1 暗褐色土 (赤色粒、炭化物を若干含む。きめ細かくしまりはない。)
- 2 暗黄褐色土 (黄褐色の細かいブロックをわずかに含む。)
- 3 暗褐色土 (黄褐色のブロックを含む。)

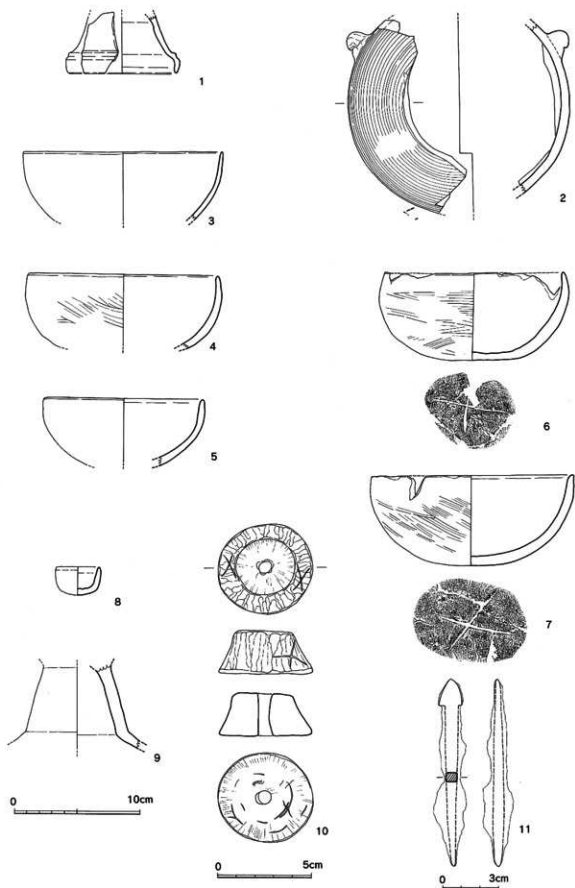
出土土器 (第23図)

1～2は須恵器である。1は高坏の脚部片で、端部は段をなし、内外面ともに面取りをした透かしを有す。3方透かしか。2は提瓶である。外面肩にはツノ状の把手が付く。3～9は土師器

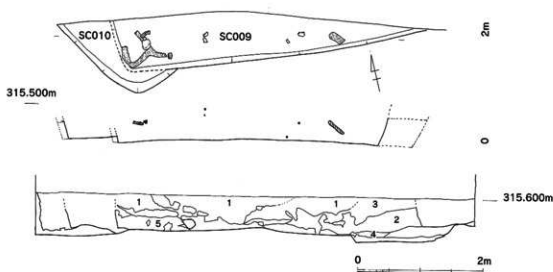


第22図 市用遺跡SC008実測図 (1/60)

である。3～8は壺、9は高坏である。そのうち6・7は床面から出土した。3の口縁は外反気味に、4・5は直線的に、6はやや内湾気味に伸び、端部はいずれも丸く収まる。3・5・6は内・外面ともにナデ仕上げで、4の外表面はヘラミガキで仕上げられ、6の外表面にはハケ目が残し、黒斑やヘラ記号が認められる。7は黒漆塗りの坏である。外面には粗いハケ目残り、底部付近にはヘラ記号も認められる。6については端部が内湾しないこと、7についてはミガキが認められないことから、これらの土師器は6世紀中頃～後半のものであろう。8はミニチュア土器である。内面にススが附着する。9は高坏の脚部である。内・外面ともにナデ仕上げである。10は緑泥片岩製の紡錘車である。外面は丁寧なケズリ仕上げが施され、底面には使用痕が残る。側面には「×」記号が施される。11は鉄罐である。カマド付近で検出した鑿箭式 (くりのみやしき) の鉄罐で鐵身部が正三角形に近い形状を呈している。



第23圖 市用遺跡SC008出土遺物實測圖 (1/2・1/3)



第24図 市用遺跡SC009・010 実測図 (1/60)

9・10号竪穴 (SC009・010) (第24図)

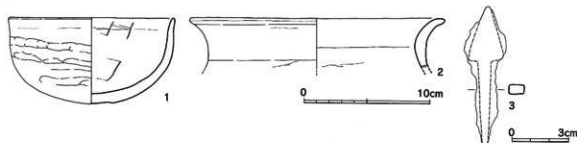
調査区中央B4・5区に位置し、SC008と重複する。当初は、覆土の状態がほぼ同じであったため、同一の竪穴遺構 (S016) として調査を実施したが、遺構掘削の結果、床面の高さや調査区北壁の状況から2つの遺構が切合っていることが明らかとなった。

SC009は北側一部が調査区にかかった状態であり、規模は不明である。現状で検出面から床面までは約0.4mを測る。覆土は5層に分かれ、1層の下面からは焼土や炭化材などが多く検出された。遺物は少なくいずれも覆土に含まれたものであり、遺構の時期を示す遺物は確認できなかった。これらの遺構では主柱穴は確認できなかった。SC010は西隅が残存しているだけで、その規模は明らかにできないが、深さは検出面から床面まで約0.3mを測る。

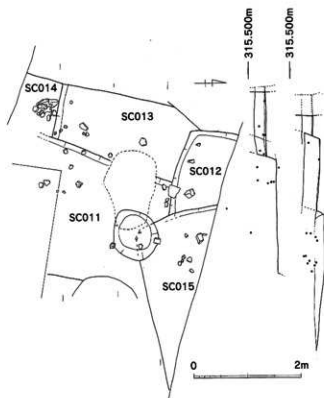
- 1 暗褐色土。(きめ細かく、ややしまりあり。)
- 2 暗黄褐色土。(橙・白色粒を含む。きめ細かくしまりなし。)
- 3 赤橙土 (焼土。炭ブロックを含む。)
- 4 暗黄褐色土。(きめはやや粗く、白色粒を含む。)
- 5 茶褐色土。(きめはやや粗く、炭・橙色ブロックを含む。)

出土土器 (第25図)

1～3はSC009から出土した遺物で、いずれも土師器である。1は坏で、赤色顔料が塗布される。内面には工具によるナデ仕上げ、外面は横方向のヘラミガキで仕上げる。2は口縁がやや反する甕の口縁部である。3は鑿箭式 (くりのみやしき) の鉄鏃で鏃身部が二等辺三角形に近い形状を呈している。



第25図 市用遺跡SC009出土遺物実測図 (1/2・1/3)



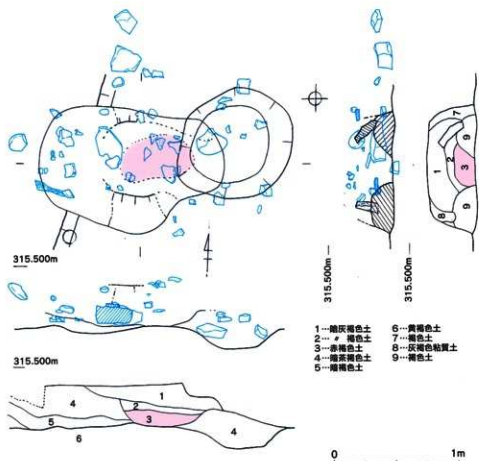
第26図 市用遺跡SC011～015実測図(1/60)

11号竪穴〈SC011〉(第26図)

調査区中央B5区に位置するが、SC012～015と複雑に切り合う。北側は調査区外へ伸び、南側はSC012・015に切られており、全体的な規模は不明であるが、カマドを有す。深さは現状で検出面から0.36mを測る。主柱穴は確認できなかった。覆土は3層で(第4図)遺物はカマド周辺で復元できるものが出土しており、これはカマド祭祀に伴う土器と思われる。出土した土器から6世紀後半頃の遺構の可能性が高い

カマド(第27回)

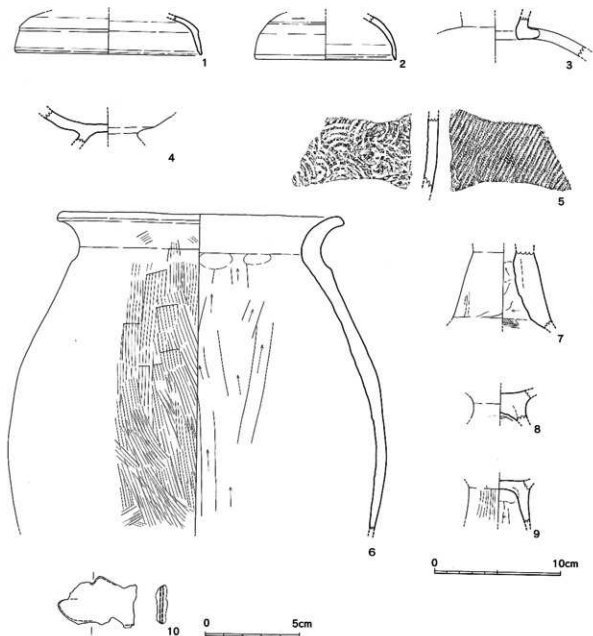
カマドは西壁に付設される。規模は焚口から壁まで約4.5m、幅約2.9mである。依存状態は良好で、カマド中央部には赤い硬化面が残っていた。支脚などの痕跡は残っていなかったが、その両端には袖部である袖石が残存していた。カマド内にはカマド壁の崩落土が残り、煙道部ははっきり確認できなかった。カマド内部には土師器の甕片や鉄器が残っていたが、これらはカマド祭祀に使用されたものであろう。



第27図 市用遺跡SC011カマド実測図(1/30)

出土土器 (第28図)

1～5は須恵器である。1・2は坏蓋で、1の肩部には不明瞭な段が、口縁端部内面にも内傾する段を有す。2の肩部には段は認められないが、口縁端部内面には1と同様、内傾する段を有す。3は平瓶の頸部付近か。内外ともにナデ仕上げである。4は高坏の脚部片で、坏部内面は不定方向のナデ、外面は回転横ナデ仕上げである。5は甕の胴部片である。内面には同心円の当て具痕、外面には平行タタキ痕が残る。6～9は土師器で、6は甕、7～9は高坏の脚部片である。6はカマド内部及びその周辺で出土したものであり、カマド祭祀に伴う土師器であろう。口縁部は大きく外反し、外面は縦方向のハケ、内面はヘラケズリで仕上げられる。長胴のタイプで肩部から口縁部にかけて厚くなることから6世紀後半のものであろう。7～9は高坏である。7・8はナデ仕上げ、9は丹塗りの高坏でヘラ削りが施される。カマド周辺で出土した7についてはカマドの支脚の可能性も考えられる。



第28図 市用遺跡SC011 出土遺物実測図 (1/2・1/3)

12号竪穴 (SC012) (第26図)

B5区SC011の北側で検出した竪穴遺構である。北側が調査区外へと続き、東側をSC032により切られているため西側隅だけが残存しないが、方形のプランを有するものと思われる。深さは検出面から0.4mで、主柱穴は確認できなかった。覆土は1層である(第4図)。遺物は出土したが、いずれも覆土に含まれていたもので時期を示す遺物は出土しなかった。

出土土器 (第29図)

1は須恵器甕である。肩部には沈線が巡り、その下位に縦方向の沈線が刻み目状に施される。



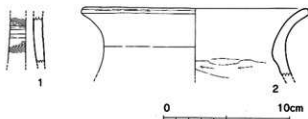
第29図 市用遺跡SC012出土遺物実測図(1/3)

13号竪穴 (SC013) (第26図)

B5区SC012の南側で検出した竪穴遺構である。三方を他の遺構から切られているため、北壁の一部と床面だけが残存する。深さは検出面から0.2mを測り、遺物は若干出土しているがいずれも覆土に含まれたものである。

出土土器 (第30図)

1は須恵器高坏である。脚部片で両側が透かし部分に当る。ハケ目調整後回転ナデを施し、沈線をめぐらした後に長方形の透かしをあける。2は壺の口縁部である。大きく外反する口縁部で、外面は横ナデ、内面はヘラ削りが施される。



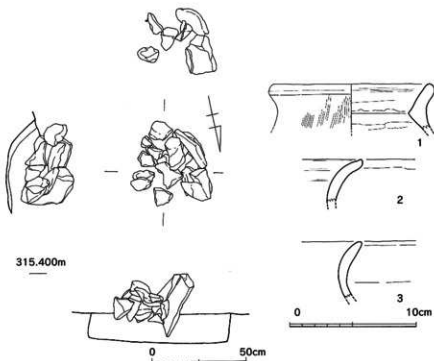
第30図 市用遺跡SC013出土遺物実測図(1/3)

14号竪穴 (SC014) (第26図)

B5区SC013の南側で検出した竪穴遺構である。SC013同様に三方を他の遺構に切れ、南側が調査区外へと伸びるため全体のプランは不明である。床面で集石遺構を確認したが(第31図)、土層を観察すると(第4図)焼土面と粘土層がその下部に存在しており、これらの集石遺構はカマドに伴う可能性が高い。

出土土器 (第32図)

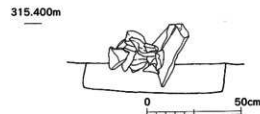
いずれも覆土に含まれていた壺の口縁部片である。1は口縁が短く直線的に立ち上がり、2・3はやや外反気味に立ち上がる。1の内面はヘラ削りにより仕上げられている。



第32図 市用遺跡SC014出土遺物実測図(1/3)

15号竪穴 (SC015) (第26図)

調査区東側B5区で検出した竪穴遺構である。平面ではプランの確認できなかったためC011の一部として遺構の掘下げを行ったが、床面と土層(第4図)からSC015の存在が明らかとなった。そのため、調査中に南壁と西壁の一部は掘り飛ばしてしまったが、西側隅を確認したので方形のプランを有する竪穴と思われる。深さは検出面から約0.5mを測る。遺物は出土しているが図示できるものではなく床面からの出土は確認できなかった。



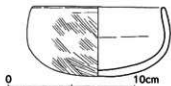
第31図 市用遺跡SC013集石実測図(1/20)

16号竪穴〈SC016〉(第33回)

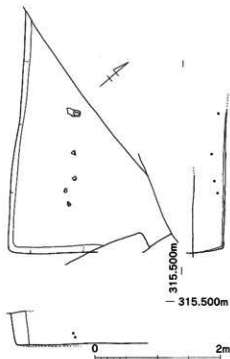
調査区東側B5区で検出した竪穴遺構である。北側は調査区外へと続く。南東隅だけを検出したため全体のプランは不明であるが、深さは現状で0.5mを測る。出土した遺物で実測できたものはわずかに1点である。

出土土器 (第34回)

1は土師器の坏である。口縁は内湾し端部は丸く収まる。内・外面ともにナデ仕上げであるが、外面にはハケ目が残る。



第34回 市用遺跡SC016出土遺物実測図(1/3)



第33回 市用遺跡SC016実測図(1/60)

17号竪穴〈SC017〉(第35回)

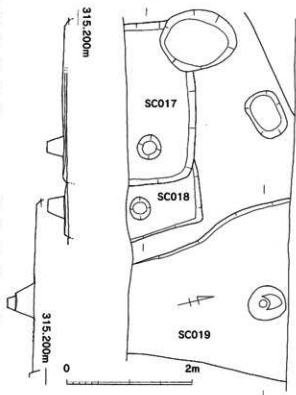
調査区東側B5区で検出した竪穴遺構である。中央部分は試掘トレンチで掘削されているが、土層を観察すると(第4図)南側は調査区外へと続くことから、長方形のプランを有す可能性が高い。短軸は2.56mを測り、深さは検出面から床面まで約0.1mで、主柱穴は1本確認した。その掘方は0.55m、深さ0.43mである。床面付近が残存しているだけで遺物は出土しなかった。

18号竪穴〈SC018〉(第35回)

B6区でSC017と重複して検出した竪穴である。調査区南側の土層では確認できないことから、SC017のテラス部分の可能性が高いが、中央部分は試掘トレンチで掘削されていて両者の関係が明確でないため、ここでは別遺構として扱う。深さは検出面から0.08mを測る。主柱穴は1本確認した。その掘方は0.55m、深さ0.43mである。ほぼ床面を検出した状況であり、遺物は出土していない。

19号竪穴〈SC019〉(第35回)

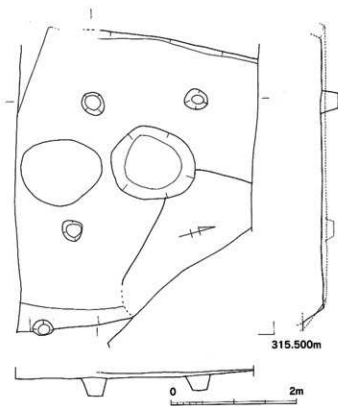
B6区でSC034の東側に隣接して検出した竪穴である。東側はS020により切られているため、全体のプランは不明である。検出面から床面までは約0.1mであり、主柱穴は1本確認した。その掘方は直径0.55m、深さ0.43mである。床面付近が残存しているだけで遺物は出土しなかった。



第35回 市用遺跡SC017~019実測図(1/60)

20号竪穴 (SC020) (第26図)

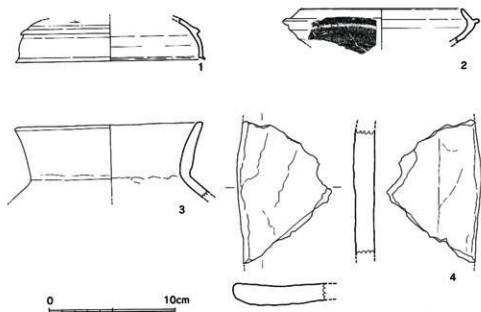
B・C6区で東側をSC021・022・023などと複雑に切りあって検出された。プランがやや不定形を呈しているようにみえるが、これは東壁の一部を試掘の際掘削したためであり、本来は方形のプランを呈していたものと思われる。遺構は北側調査区へと伸び、土層を観察すると(第4図)カマドの袖石が確認できることから北側にカマドを付設した状況が看取できる。中央部分には径が約1.3m、深さが約0.15mの粘土質の土を充填した土坑が存在する。東西方向に約4.4m、検出面からの深さは0.2mを測る。主柱穴は4本確認しており、掘方の直径は0.35m~0.4m、深さ0.15m~0.32mを測り、最も広いところで主軸をとると主軸方位はN-67°-W。ほぼ床面だけの検出であり遺物は若干出土したが、いずれも覆土内の遺物であり時期を示すものは確認できなかった。



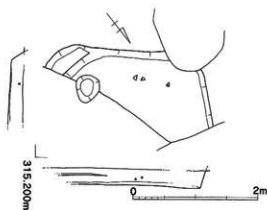
第36図 市用遺跡SC020実測図(1/60)

出土土器 (第37図)

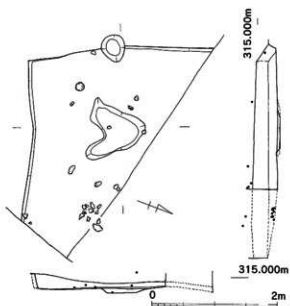
1・2は須恵器である。1は坏蓋で、天井部と口縁部を分ける稜は短く、口縁部はわずかに開き、端部は内傾する明瞭な段差をなす。今回の調査では一番古い時期の坏蓋であり、TK47段階(5世紀後半代)のものであろう。2は坏身である。口縁部が内傾し短く立ち上がる。3は甕の口縁部で外反し直線的に立ち上がる。4は移動式カマドの袖部であろう。



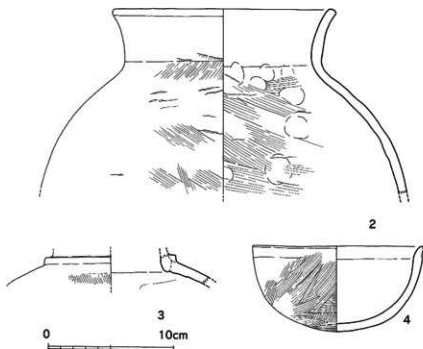
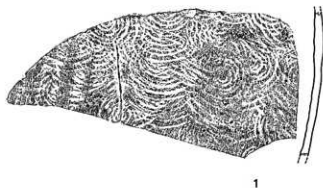
第37図 市用遺跡SC020出土遺物実測図(1/3)



第38図 市用遺跡SC021実測図 (1/60)



第39図 市用遺跡SC022実測図 (1/60)



第40図 市用遺跡SC022出土遺物実測図 (1/3)

21号竪穴〈SC021〉(第38図)

C6区SC020とSC022に挟まれるように位置する。西側部分にはテラスを有しており、現状で検出面からテラスまで0.1m、床面まで0.25mを測る。遺構検出時にはSC029との切合い関係が不明であったが、土層を観察すると(第4図)、SC029の下位に存在する竪穴遺構であることが明らかになった。遺物が若干出土している。

22号竪穴〈SC022〉(第39図)

B6区で検出された竪穴である。SC020・021・023を切って掘り込まれている。北側部分が調査区外へと伸びており、中央付近では不定形の土坑を確認したが主柱穴は確認できなかった。深さは検出面から0.25mを測り、北側へわずかに下る。西壁付近でほぼ完形の壺が、北壁付近の床面で甕片がまとまって出土したが、それ以外の土器は復元できなかった。

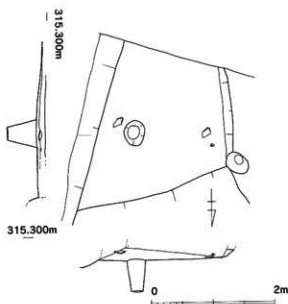
出土土器(第40図)

1は須恵器の甕の胴部片である。内面には同心円の当て具痕、外面は平行タタキ後力キ目仕上げである。2~4は土師器

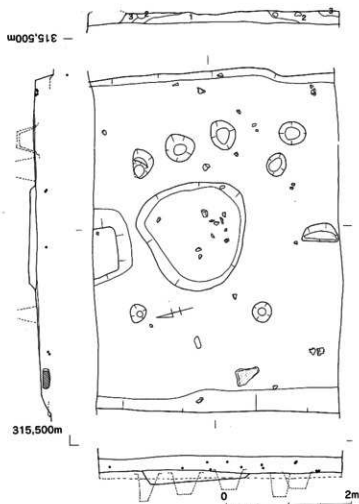
である。2は甕で、口縁はやや外反しながら立ち上がり端部は丸く収まる。内面はハケ目仕上げ、外面はハケ目後にナデ仕上げを施す。3は、頸部付近に三角突帯を巡らす甕片で、弥生土器か。4は坏である。内湾しながら立ち上がる口縁部は、端部で外反し丸く収まる。内面は丁寧なナデ仕上げ、外面はハケ仕上げが施されていることから、6世紀後半のものである。同じく床面から出土した2についても同時期のものであろう。

23号竪穴 (SC023) (第41図)

C6区で検出された竪穴である。SC022・SC024によって切られていて、南側は調査区外へと続いたため平面プランは不明である。主柱穴は1本確認しており、掘方の直径は0.4m、深さ0.5mを測る。床面で遺物を検出したが細片であり、復元できるものはなかった。



第41図 市用遺跡SC023実測図(1/60)



第42図 市用遺跡SC024実測図(1/60)

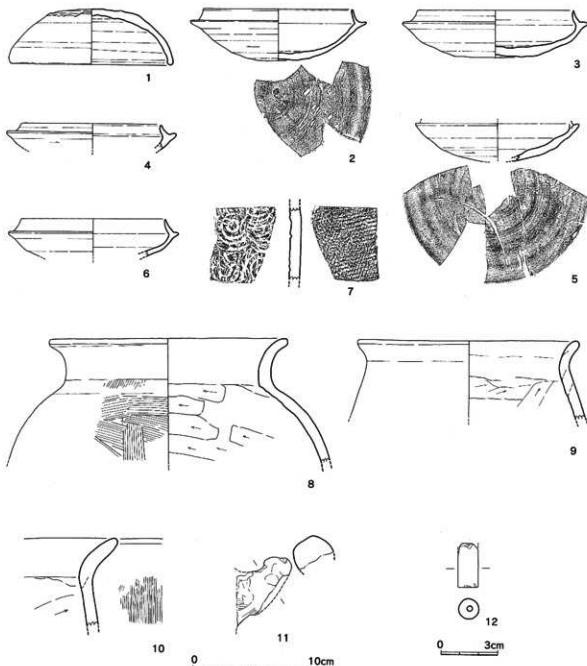
24号竪穴 (SC024) (第42図)

調査区東側C7区に位置する。南北両端は調査区外へと伸びる。本調査区では残存状況の良好な遺構である。北側ではカマドの一部と思われる幅約1.0m、長さ約0.5m程の焼土や炭化物を含む明黄色の粘土の高まりを確認したが、トレンチを入れても遺物や燃焼部を確認できず、カマド廃棄時に壊された崩落土が残存したものであろう。この竪穴の規模であるが、東西方向に約5.2m、深さは検出面から床面0.3を測り、主柱穴は四本確認できる。掘方の直径は0.28m～0.45m、深さは0.38m～0.45mを測り、最も広いところで主軸をとると主軸方位はN-68°-Wである。中央には直径が約1.8m、深さ約0.18mの灰土土の詰まった土坑が掘り込まれる。床面付近では須恵器などの遺物が出土した。覆土の堆積は三層である。

- 1 黒色土 (きめ細かくややしまる。)
- 2 褐色土 (10cm大の黄褐色ブロックを含む。)
- 3 暗褐色土 (きめ細かくしまりはない。)

出土遺物 (第43図)

1～6は須恵器である。1は坏蓋で、口縁端部内面には沈線状の段が廻り、外面にはヘラ削りが施される。2～5は坏身である。5の口縁部は立ち上がりが欠損しているが、いずれも口縁が内傾し短く立ち上がるタイプである。2・3の外面にはヘラ削りが施される。これらの坏はその形状からMT85～TK43段階（6世紀後半～7世紀初頭）のものであろう。7は甕の胴部片である。内面には同心円の当て具痕、外面には平行タタキ痕が残る。8～11は土師器である。8～10は甕で、口縁部はいずれもやや外反するタイプのもので、8の口縁端部は面取りが施されるが、他は丸く収まる。いずれも内面はヘラ削り仕上げで、8・10の外面はハケ仕上げが施される。11は甕の把手部で、貼り付け部分から剥がれていてススが付着している。12は碧玉製の管玉で一方が欠損している。



第43図 市用遺跡SC024出土遺物実測図(1/2・1/3)

25号壁穴 (SC025) (第44図)

調査区東端C7・8区に位置する。西側をSD002、東側をSC026により切られ、南側は調査区外へ伸びる。

全体的な規模は不明であるが、カマドを有す。深さは現状で検出面から0.25mを測る。主柱穴は2本確認でき、掘方の直径は0.5m～0.52m、深さは0.45m～0.50mを測り、主軸方位はN-6°-Wである。また床面にはアカホヤによる張床が認められた。中央には径が約1.4m、深さ約0.2mの土抗が掘り込まれる。覆土は3層で(第44図)、カマド周辺ではカマド祭祀に伴う須恵器や土師器が出土している。

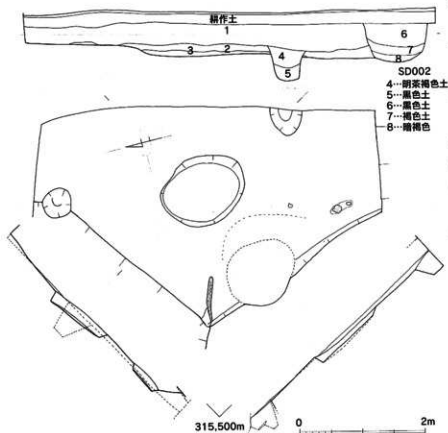
1 暗褐色土(黄褐色ブロックを含み、キメはやや荒くしまりあり。)

2 褐色土(赤色粒や橙粒を含む。)

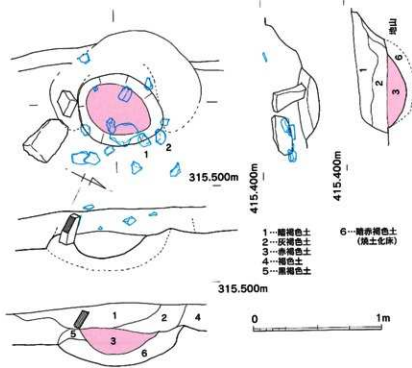
3 黄褐色土(アカホヤ混じりの貼床。硬くしまっている。)

カマド (第45図)

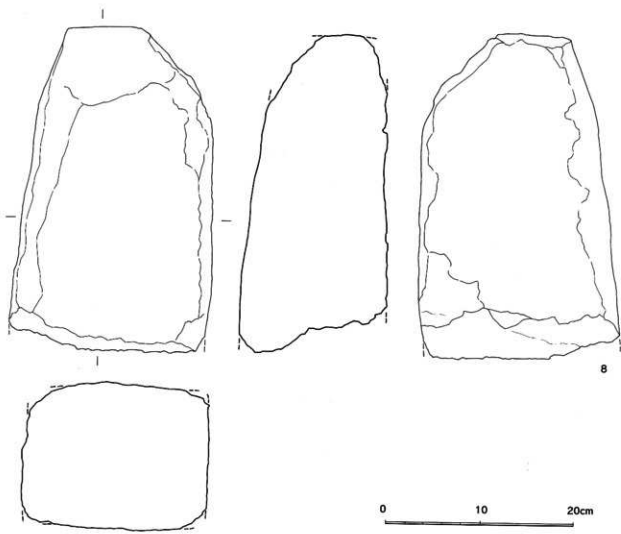
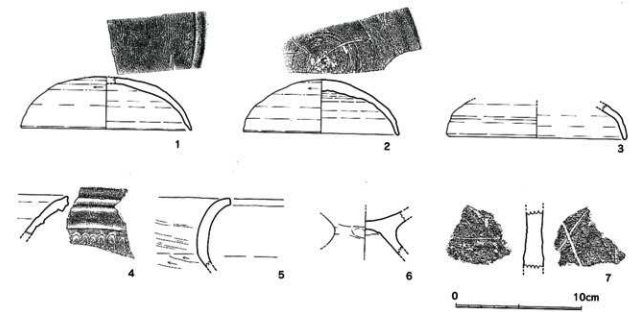
カマドは北壁に付設される。規模は焚口から壁まで約2.8m、幅約3.5mである。残存状態はあまり良くないが、カマド中央部には赤い硬化面が残っていた。支脚などの痕跡は残っていなかったが、その両端には袖部である袖石が残存していた。カマド内にはカマド壁の崩落土が残り、煙道部ははっきり確認できなかった。カマド周辺には須恵器が2個、半裁された状態で置かれていた。これらはカマド祭祀に伴うものであろう。



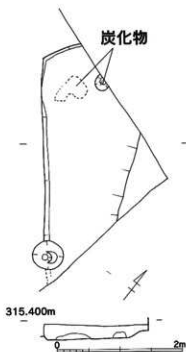
第44図 市用遺跡SC025実測図(1/60)



第45図 市用遺跡SC025カマド実測図(1/30)



第46图 市用遺跡S025出土遺物実測図 (1/3·1/4)



第47図 市用遺跡SC026実測図(1/60)

出土土器 (第46図)

1～4は須恵器である。1～3は坏蓋で、いずれも外面は回転ヘラ削りで仕上げる。1の口縁端部内面はやや内傾し、3の肩部には沈線が巡る。1・2については半分に割った状態で口縁部を上にしてカマド周辺に置かれていたことから、カマド祭祀に使用されたものであろう。いずれもその形状から、TK43段階（6世紀末～7世紀初頭）のものであろう。4は隻の口縁部片である。口縁端部やや下位に断面四角の突帯を巡らし、さらにその下位には櫛描波状文を施す。5・6は土師器で、5は隻の口縁部、6は高坏の脚部である。5はやや外傾するタイプで、胴部内面はケズリ仕上げが施される。6は内・外面ともにナデ仕上げである。7は土製品の小片であるが、器種は不明である。内・外面ともにナデ仕上げで、片面には「X」のヘラ記号が施される。8はカマド付近で検出した凝灰岩製の石柱で、6面ともに面取りされている。カマドの袖石であろう。

26号竅穴 (SC026) (第47図)

調査区東端に位置して、SC033と重複する。東側は調査区外へと伸び、全体的な規模は不明である。主柱穴は確認できず、深さは現状で検出面から0.25mを測る。床面では遺物や炭化物が出土したが図示できるものはない。

土坑 (第48図)

1号土坑 (SK001)

調査区中央B4区北壁沿いに位置し、北側が調査区外へと続く。長径約1.6m + α 、短軸約1.5mの楕円形をなす。深さは検出面から床面まで約0.44mで、内部から遺物は出土していない。

2号土坑 (SK002)

調査区東側C6区南壁沿いに位置する。長径約1.3m、短軸約1.0mの楕円形をなす。深さは検出面から床面まで約0.25mで、遺物は内部から磨石が1点出土した。

5号土坑 (SK005)

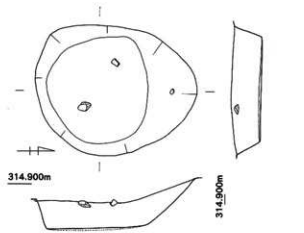
SK035の西に位置する。長径約1.55m、短軸約1.0mの楕円形をなし、床面の南西部にはテラスを有す。深さは検出面から床面まで約0.1m、テラスまでは0.05mを測る。床面には二本の柱穴が存在するが土坑に直接伴わない可能性が高い。

3号土坑 (SK003)

調査区東側C7区にSK004・005と並んで位置する。長径約1.2m、短軸約0.9mの楕円形をなし、深さは検出面から床面まで約0.33mである。調査中、掘り過ぎのため南側が大きく広がってしまった。内部から大型の須恵器甕が出土しており、5世紀後半頃の遺構であろう。

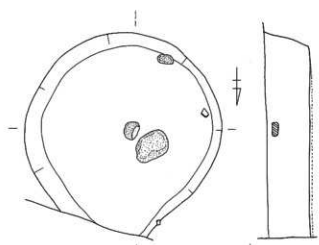
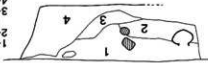
出土土器 (第49図)

1は須恵器の甕である。口縁部は意図的に打ち欠いていて形状は不明である。胴部最大径は体部中ほどより上にあり、胴部径は17.9～18.1cmを測る。胴部最大径の直上に二本の沈線を巡らし、間に櫛描波状文を施した後、穿孔する。また口縁部の立ち上がり部分にも櫛描波状文を巡らす。内・外面ともに自然釉がかかる。頸部～口縁部にかけては意図的に破砕される。口縁部の形状が不明ではあるがTK47段階（5世紀後半）の可能性が高い。

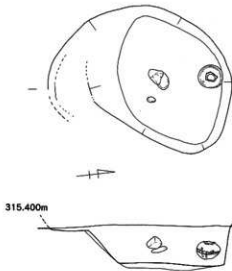


SK002

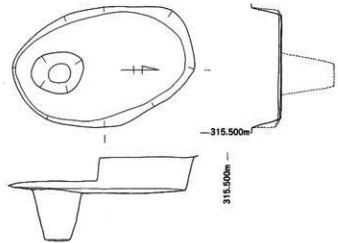
1... 土中埋設
2... 土中埋設
3... 土中埋設
4... 土中埋設



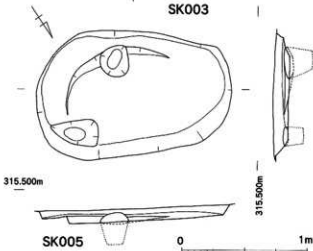
SK001



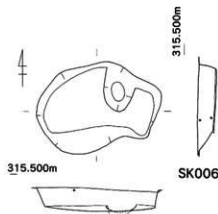
SK003



SK004



SK005



SK006



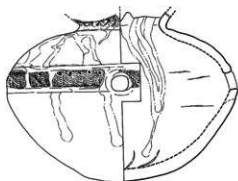
第48図 市用遺跡土坑実測図 (1/60)

6号土坑 (SK006) (第48図)

SC035のカマドに接するように位置する。長径約1.0m、短軸約0.65mの不整形円形をなし、深さは検出面から床面まで約0.18mである。中央やや東よりに柱穴が存在するが、直接この土坑に伴わない可能性が高い。

4号土坑 (SK004) (第48図)

SC035の南に位置する。長径約1.5m、短軸約0.95mの楕円形をなし、深さは検出面から床面まで約0.4mである。南側部分は試掘トレンチのため掘削されている。内部から遺物は出土していない。

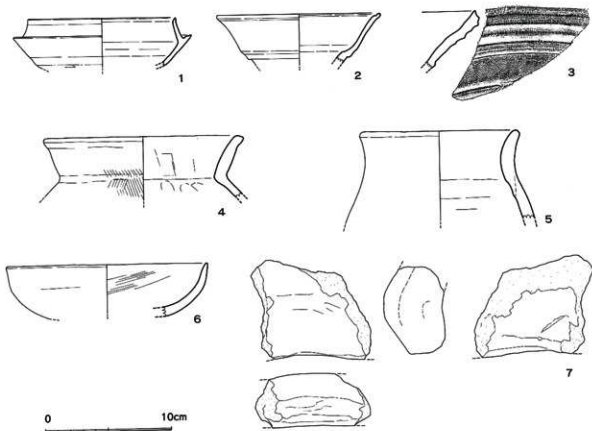


0 10cm

第49図 市用遺跡SK003出土遺物実測図 (1/3)

出土地点不明遺物 (第50図)

1～8は表土等に含まれていたもので、いずれも一括して取り上げた遺物である。1～3は須恵器である。1は坏身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部内面は内側へ傾斜する。外面にはヘラ削りが施される。2は無蓋高坏の口縁部か。口縁部は外上方へと開き、口縁部と底部との境界には段差がつく。端部内面には沈線が巡る。3は甕の口縁部である。端部外面下位には断面四角の突帯を巡らす。外面には櫛波状文が施される。4～6は土師器である。4・5は甕でいずれも口縁部がやや外傾して立ち上がるタイプである。4の内面は削り仕上げが施されるが、5にはヘラ削りが確認できないことから弥生時代の粗製の甕の可能性が高い。6は坏である。内・外面ともにナデ仕上げである。7は移動式カマドの焚き口の部分か。



第50図 市用遺跡一括遺物実測図 (1/3)

柱穴出土遺物 (第51図)

1はSP001から出土した須恵器の坏身である。口縁部が内傾し短く立ち上がるタイプで、外面にはヘラ削りが施される。

(4) その他の遺構

市用遺跡では古墳時代の遺構以外にも溝や柱穴を検出した。これらの遺構からは時期を示す遺物は出土していないため、時期を明確にすることはできなかった。柱穴も数多く検出したが、建物としてまとまるものは存在しない。以下、溝状遺構について説明を加える。

溝状遺構

調査区全体で2条検出された。いずれも浅く、水田の区画整理等で大きく掘削され本来の規模は不明である。SD001はほぼ南北方向、SD002は東西方向に走る。覆土については2号溝 (SD002) で観察できた。いずれも古墳時代の遺構の上から掘り込まれていることから、集落が廃絶された後の遺構である。しかし、いずれの溝も覆土から土器の細片が検出されただけで、時期や性格を明確にする遺物は検出できなかった。周辺の状況や溝を伴うような遺構が確認できないことから、これらの溝は近世の水田畦畔の拡張に伴うものと考えられる。

1号溝 (SD001) (第52図)

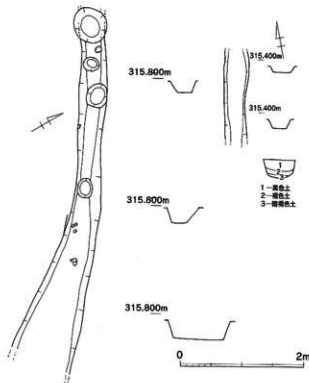
調査区西側A3区に位置する。東西方向に走る溝で、SC002の上面に掘り込まれる。現状で長さ長さが6.1+ α m、幅は東に行くほど広く0.4m~1.1m、深さ0.2m~0.4mを測る。東に行くほど深くなることから、水流は西から東であったと思われる。

2号溝 (SD002) (第52図)

調査区東側C7区に位置する。南北方向に走る溝で、現状で長さが1.5m+ α m、幅は0.35m~0.45m、深さ0.15m~0.20mを測る。南ほど深くなることから水流は北から南であったと思われる。



第51図 市用遺跡SP001 出土遺物実測図 (1/3)



第52図 市用遺跡 SD001・002 実測図 (1/60)

第4章 まとめ

市用遺跡は竹田市大字市用に所在する古墳時代を中心とした遺跡である。この遺跡の西には市用横穴墓群が存在することから、古墳時代の遺跡が周辺に展開することは予想されていたが、平成16年(2004)に、圃場整備に伴う竹田市教育委員会の緊急調査により、この一帯には6世紀後半から7世紀前半を中心とした集落遺跡が展開していることが明らかとなった。本調査区は、竹田市が調査した個所に隣接する県道白丹竹田線の道路拡張部分にあたり、調査の結果、竪穴遺構26基、土坑6基、溝状遺構2条を検出した。ここでは、本遺跡で確認した遺跡について時代ごとに説明を加える。

1 旧石器時代

今回の調査では、台形様石器、ナイフ形石器、スクレイパーなどの石器が8点出土した。竹田市教育委員会の調査では旧石器は出土していないため、市用遺跡では初の出土例となった。しかし、これらの石器は、いずれも古墳時代の遺構覆土に含まれていたもので、包含層は確認できなかった。調査区西側の隣接地にはローム層を伴う小丘陵が存在することや、旧石器の出土地点が調査区西側に集中する状況(第5表)からみても、今回出土したこれらの旧石器は、本遺跡に直接伴うものではなく、隣接する小丘陵から流れ込んだ可能性が高いと思われる。いずれにしてもこれらの遺物は、この一帯における人々の生活の営みが旧石器時代まで遡ることを示すものであり、この地域の歴史を知る上で大変重要な成果であるといえる。

2 縄文時代

縄文時代についても旧石器時代同様に、遺構や包含層は確認できなかったが、古墳時代の遺構の覆土から土器や石器などの遺物を検出した。出土した土器は鐘崎式土器を中心とした後期の土器群が主であり、晩期の黒色磨研土器や刻目突帯文土器が若干であるが出土している。石器については角錐状石器や石匙などが出土した。本遺跡では遺物包含層が確認できていないこと、遺跡の西側丘陵では縄文時代の遺物が出土すること、などからこれらの遺物は旧石器時代同様に西側丘陵から流れ込んだ可能性が高い。しかし、上流域にあたる炭竈遺跡では、弥生・古墳時代の集落遺跡とともに縄文時代の包含層も確認されており、本調査区では確認できなかったものの、遺跡内に縄文時代の遺跡が存在した可能性は否定できない。

3 弥生時代

弥生時代も縄文時代同様に遺構や遺物包含層は確認できなかった。古墳時代の遺構からわずかに土器片が数点出土しただけである。しかし、本遺跡と同様な谷あいの平坦部に位置する炭竈遺跡では、弥生時代の竪穴遺構と古墳時代の竪穴遺構が重複する状況が確認されていることから、本調査区では認められなかったものの遺跡内に弥生時代の遺構が存在する可能性は十分考えられる。

4 古墳時代

(1) 遺構について

今回の調査では、6世紀前半～7世紀初頭の竪穴遺構26基、5世紀後半のものを含む土坑6基を検出した。竪穴遺構については、カマドを付設したものが5基含まれるなど、いずれも住居として使用したものである。しかし、調査区の幅が狭い上、遺構の切り合いが激しく、遺存状況の良好なものは少なかった。遺構の時期をほぼ確定できたものは、比較的良好的な遺物の出土状態が確認できた、SC008・011・022・024・025で、いずれも6世紀前半～7世紀初頭の範疇で捉えることができる(第1表)。竹田市教育委員会の調査では、本調査区の南側に隣接する部分で、ほぼ同時期の竪穴遺構群を検出していることから、本調査区で検出した時期不明の竪穴遺構もこの範疇に含まれるものとする。次に土坑であるが、中にはSC003のように、5世紀後半まで遡るものが存在する。他の土坑についてはSK006については不明であるが、SK001・002は竪穴遺構の上から掘り込まれていることから、6世紀後半以降、SK004・005は分布やその規模からSC003とほぼ同様の時期と思われ、SK003を中心とした3基の土坑は竪穴遺構に先行する遺構群といえる。

さて、今回検出した竪穴遺構については、前述のように調査区の関係で全体的なプランや規模について明らかにすることができなかったが、特徴的なこととして、カマドを付設した竪穴には、必ず床面中央に浅い

土坑が掘り込まれていることがあげられる。この土坑はいずれも深さが10cm～20cm程度で、灰色粘質土が充填される。床面ほぼ中央に位置することから、暖炉といった可能性も考えられるが、若干の炭化物は認められたものの火を使用した痕跡は確認できなかった。今回の調査ではその用途を明らかにすることはできなかったが、この用途を解明することは、この時期の竪穴遺構の構造を考える上で今後の大きな課題であるといえる。

(2) 遺物について

土器類

今回の調査では、須臾器や土師器などの土器類や移動式カマドなどの土製品が出土した。これらの遺物は6世紀前半から7世紀初頭にかけてのものが中心である。その中で注目されるのが、黒漆碗及び移動式カマドであろう。黒漆碗については、福岡県の筑後川・矢部川流域で5世紀後半～6世紀前半にかけ盛行し7世紀初頭にかけて減少することが知られ、県内では5世紀後半のものが日田市大迫遺跡で、6世紀前半のものが同じ竹田市の直入町長湯横穴墓群6号墓前庭部から出土している^(註5)。今回出土したものは明確なミガキが認められず6号墓出土のものに比べ時期がやや新しくなると思われるが、この黒漆碗は明らかに筑後地方の影響を受けたものであり、このことは筑後川流域一日田地域―長湯―竹田といった山間部の交易ルートの存在を伺わせるものである。移動式カマドについては、竹田市の調査でも出土しているが、本調査区では26基の竪穴遺構中2基でわずかに小片が出土したにすぎない。この出土状況は、移動式カマドを普遍的に使用した後に廃棄したというより、何らかの意図を持って破砕し使用した可能性が考えられる。ところで、本遺跡の北西部に位置する久住町板切遺跡では、遺物の出土状況から竪穴廃棄に伴う廃絶祭祀について詳しい検討が行われている^(註6)。本遺跡の遺物出土状況を見ると、SC008やSC002の床面での検出した土師器碗や甕、SK004の甕などの状況は、板切遺跡のそれに類似している。同じ竹田・直入地域ということとを考慮すると、本調査区でも板切遺跡同様に竪穴廃絶に伴い廃絶祭祀が執り行われた可能性が高い。前述の移動式カマドについても、これが一般に使用されるものでなく、本来の用途が祭祀用であることを考えると、このカマド小片も他の土器と同様、廃絶祭祀に使用されたと考えても問題はないのではなかろうか。その他、カマドの廃絶祭祀が確認でき、SC011では破砕した甕をカマド破壊後に周辺や内部に散布する状況、SC025では、カマドの焚き口付近に半裁された須臾器坏身を置く行為や袖石を抜き取り竪穴内に置く行為が認められた。

その他の遺物

その他の遺物としては石製紡錘車、管玉、鉄鏃などがある。結晶片岩製の紡錘車には側面に「×」記号が2箇所刻まれ、管玉については、片方を意図的に欠いた状態で出土している。これらの遺物の出土状況は、床面でなく移動式カマドの小片同様に覆土内から出土したものである。前述の板切遺跡では、竪穴（イエ）は一個の生命体、廃絶は（死）を意味していたと想定し、竪穴廃絶に際しては、埋め戻して混入したと思われるものを除く、人が使用したすべての遺物を備える祭祀行為を行ったとされ、鉄鏃については、投棄したものではなく射込んだことを想定している（註7）。そうであれば、今回出土した石製紡錘車、管玉等の特殊遺物や鉄鏃も埋め戻しの際に混入したものであるというより、竪穴廃絶の祭祀に使用された可能性が高く、出土した管玉の破損状況や紡錘車側面の「×」記号についても、本来の役割の終焉を意味するものとして解釈できるのではなかろうか。廃絶に伴う祭祀行為を明らかにする上でも、覆土内の遺物については鉄鏃を含めその出土状態には十分注意する必要がある。

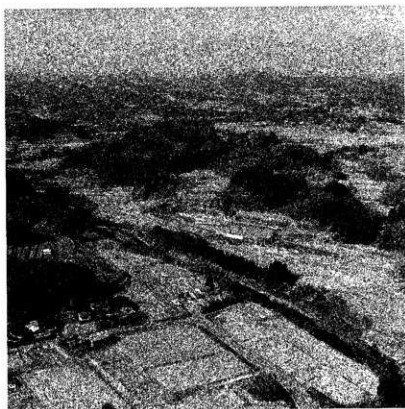
(3) おわりに

以上、今回の調査結果について遺構・遺物ごとに検討を加えてきたが、まとめると、1) 本調査区は古墳時代後期（6世紀前半～7世紀初頭）の集落遺跡が中心であり、この一帯の歴史が旧石器時代まで遡ることができること。2) 古墳時代後期の集落成立が5世紀後半まで遡ることができること。3) 検出した竪穴遺構や土坑では、カマドを含め廃絶祭祀が行われた可能性が強いこと。などということになる。特に1) の6世紀前半～7世紀初頭の集落が中心であるということは、隣接する市用横穴墓群の造墓時期（6世紀後半）

と時期的な一致をみることになり、これは両者の間には密接な関係が存在することを示している。位置的関係からみても本調査区を含め市用遺跡に展開する当該期の集落が、横穴墓群の遺跡主体であると考えても問題はなかろう。また、2)については、近接する菅生台地に展開した弥生時代以降の拠点的な集落が終焉する時期と重なる。これは、まさに「古墳時代中期以降、鉄製農具の発達により狭隘な段丘や山間の谷間の開発が進み、川沿いに集落が点在し横穴墓が造営される」という社会の再編成に連動した状況が伺える。しかし、炭竈遺跡では竪穴遺構が、本遺跡でも弥生時代の遺物が確認できたように、狭隘な段丘には弥生時代からすでに小規模な集落が点在した可能性は高く、古墳時代中期以降の社会の再編成を考える上で、拠点的な集落の終焉、分散だけでなく、このような小集落の成長も考えていく必要があると思われる。

最後になるが、調査期間中、特に平成17年12月は例年のない寒波であった。そのため、ほとんど毎日雪が降る中、朝の霜柱の除去作業から積極的に発掘調査に参加していただいた渡辺桂子さん、河室フミ子さん、佐藤フエ子さん、河室哲子さん、佐竹鈴子さん、今村満口さん、古荘昌子さん、大塚たつよさん、大塚久子さん、佐藤勢津子さん、小高 隆巳さん、三浦春男さんには名前を記して感謝の意を表しまとめとする。

- (註1) 真田博幸篇 『市用遺跡 平原遺跡』 2006 竹田市教育委員会
- (註2) 竹田市教育委員会の御教授による
- (註3) 高橋信武篇 『炭竈遺跡』2000 大分県教育委員会
- (註4) 註3に同じ
- (註5) 甲斐寿義篇 『長湯横穴墓群 桑畑遺跡』 2004 大分県教育委員会
- (註6) 宮内克巳篇 『板切遺跡群 (I~V)・小原田遺跡』 1999 久住町教育委員会
- (註7) 註6に同じ



第2表 市用遺跡出土土器類表1

番 号	出土位置	器種	法 藍			胎 土										調 整	備 考		
			口唇傾	底径/外径	器高	長石	角閃石	石英	金雲母	白・灰	赤・褐	砂粒	色 調	内 外					
15	1	SC002	坏身	-	-	○			○							内 黄灰色 外 淡褐色	内 紅土コナデ・紅土ミコナデ 外 紅土コナデ・紅土ヘラケスリ		
15	2	SC002	坏	(15.0)	-	○	○	○	○	○						内 ナデ・横ナデ 外 ハケ目横ナデ			
15	3	SC002	直口壺(13.6)	-	-	○	○						△	○	暗赤褐色	内 横ナデ 外 横ナデ		風痕あり	
17	1	SC003	坏身	(13.8)	-16.6	-	○	△	○	○					暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ・回転ヘラ削り			
17	2	SC003	ハソウ	-	-	-	○	○	○	○						内 白灰色 外 緑灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ・波状文		
17	3	SC003	高坏	-	-	-	○	○	○	○						内 白灰色 外 黒灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		すかし
17	4	SC003	甕	(10.1)	-	-	-	○	○	○						暗茶褐色	内 横ナデ 外 横ナデ		
17	5	SC003	甕	-	-	-	○	○	○	○						暗茶褐色	内 横ナデ 外 横ナデ・削り		弥生土器
17	6	SC003	甕	(10.5)	-	-	○	○	○	○						茶褐色	内 ヘラ削り 外 横ナデ・ハケ目		
17	7	SC003	埴	(17.6)	-	-	○	○	○	○						淡赤褐色	内 横ナデ・ヘラミガキ 外 タタキ・横ナデ・ヘラミガキ		
17	8	SC003	埴	-	-	-	○	○	○	○						暗茶褐色	内 ナデ 外 ナデ・ヘラ磨き		
17	9	SC003	高坏	-	-	-	○	○	○	○						赤褐色	内 横ナデ・縦ナデ 外 横ナデ・ナデ		
19	1	SC004	坏身	(10.3)	-	-	○	○	○	○						内 白灰色 外 暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
19	2	SC005	甕	(17.0)	-	-	○	○	○	○						明褐色	内 横ナデ 外 横ナデ		
21	1	SC007	甕	-	-	-	○	○	○	○						内 黄灰色 外 黒灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
21	2	SC007	甕	(19.4)	-	-	○	○	○	○	○	○	○	○	○	暗赤褐色	内 横ナデ 外 横ナデ・ヘラ削り		
21	3	SC007	高坏	-	-	-	○	○	○	○						淡黄褐色	内 横ナデ 外 横ナデ・ヘラミガキ		
23	1	SC008	高坏	-	-	-	○	△	○	○						内 灰色 外 灰黄色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
23	2	SC008	提瓶	(17.6)	-	-	○	△	○	○						内 黄灰色 外 暗灰色	内 回転横ナデ 外 カキ目		スガシ・自然跡
23	3	SC008	埴	(16.0)	-	-	○	○	○	○						明黄褐色	内 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・ナデ		
23	4	SC008	埴	(15.0)	-	-	○	○	○	○						明黄褐色	内 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・ヘラミガキ		
23	5	SC008	埴	(12.8)	-	-	○	○	○	○						明黄褐色	内 丁草ナデ 外 横ナデ・ナデ		
23	6	SC008	埴	14.2	6.0	6.8	○	○	△	○						赤褐色	内 横ナデ・ナデ 外 ハケ目ナデ	ヘラ記号・墨痕	
23	7	SC008	埴	16.1	7.0	5.0	○	○	○	○						黒黄褐色	内 横ナデ・ナデ 外 ハケ目横ナデ	ヘラ記号・墨痕	
23	8	SC008	にろび	(3.3)	2.2	-	○	○	○	○						暗茶褐色	内 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・粗いナデ		
23	9	SC008	高坏	-	-	-	○	○	○	△						赤褐色	内 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・ナデ	内面スス付	
25	1	SC009	坏	13.2	-	6.8	○	○	○	○						明褐色	内ハケ目ナデ 外 ヘラミガキ	脚	
25	2	SC009	甕	(20.3)	-	-	○	○	○	○						明茶褐色	内 横ナデ 外 横ナデ	赤色顔料付着	
28	1	SC011	坏蓋	(14.8)	-	-	○	○	○	○						暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
28	2	SC011	坏蓋	(14.8)	-	-	○	○	○	○						内 淡黄褐色 外 暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ・回転ヘラ削り		
28	3	SC011	平瓶	-	-	-	○	○	○	○						内 青灰色 外 黄褐色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
28	4	SC011	高坏	-	-	-	○	○	○	△				○	淡灰色	内 不定方向ナデ 外 回転横ナデ・ナデ			
28	5	SC011	甕	-	-	-	○	○	○	○						内 青灰色 外 暗灰色	内 同心円の当具痕 外 平行タタキ能力キ目		
28	6	SC011	甕	(22.8)	-	-	○	○	○	○						明茶褐色	内 横ナデ・ナデ・ヘラ削り 外 ハケ目横ナデ	外蓋すず付	
28	7	SC011	高坏	-	-	-	○	○	○	△						淡褐色	内 ハケ目・ナデ・ヘラケスリ 外 横ナデ・ナデ		
28	8	SC011	高坏	-	-	-	○	○	○	△						明褐色	内 ナデ 外 ヘラ削り		
28	9	SC011	高坏	-	-	-	○	○	○	△						灰白色	内 ナデ・ヘラ削り 外 ヘラ削り	丹塗り	
29	1	SC012	壺	-	-	-	○	○	○	○						黄灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ・沈線		
30	1	SC013	高坏	-	-	-	○	○	○	○						暗灰色	内 ナデ 外 回転横ナデ・ハケ目・沈線	透かし有り	
30	8	SC013	甕	(8.1)	-	-	○	○	○	○						明茶褐色	内 横ナデ・ヘラ削り 外 横ナデ	外面スス付	

第3表 市用遺跡出土土器観表2

番号	出土位置	器種	法 窯										胎 土	色 調	調 整	備 考	
			口縁形	総径	器高	長石	内門石	石英	金雲母	白灰	赤褐	砂粒					
32	1	SC014	甕	(13.2)	-	-	●	●	○	○	○	○	○	●	明茶褐色	内外 ハケ目後横ナデ 横ナデ後ヘラ削り	内面入ス付
32	2	SC014	甕	-	-	-	○	○	○	○	○	○	△	明茶褐色	内 横ナデ 外 横ナデ		
32	3	SC014	甕	-	-	-	△	△	○	○	○	○	△	淡褐色	内 横ナデ 外 横ナデ		
33	1	SC016	坏	(10.6)	-	(5.4)	△	△	○	○	○	○		暗灰褐色	内外 横ナデ・ナデ 外 ハケ目後横ナデ・ナデ		
37	1	SC020	坏蓋	(15.0)	-	-	○	△	○	○	○	○		内 暗褐色 外 暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ・回転ヘラ削り		
37	2	SC020	坏身	(13.0)	(15.8)	-	○	○	○	○	○	○		暗灰色	内外 回転横ナデ 外 回転横ナデ・回転ヘラ削り	自然軸・ ヘラ記号	
37	3	SC020	甕	(15.0)	-	-	●	●	●	○	○	○	●	明褐色	内 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・ナデ		
37	4	SC020	移動式 カマド	-	-	-	●	●	○	○	○	○	●	明褐色	内外 ヘラ調整・ナデ ヘラ調整・ナデ		
40	1	SC023	甕	-	-	-	○	○	○	○	○	○		暗黄灰色	内外 同心円の当具取 外 平行タタキ後力半目		
40	2	SC023	甕	17.9	-	-	●	●	○	○	○	○	△	赤茶褐色	内外 指節ミズ・ハケ目 外 ハケ目後ナデ		
40	3	SC023	甕	-	-	-	●	●	○	○	○	○	●	明褐色	内外 ナデ・ヘラ削り 横ナデ		
40	4	SC023	坏	13.5	-	6.7	●	●	○	○	○	○	△	赤茶褐色	内 1等なナデ 外 ハケ目	頸部	
43	1	SC024	坏蓋	13.0		7.1	○							灰黄色	内外 回転ヘラ削り 回転横ナデ		
43	2	SC024	坏身	(11.8)	(14.0)	(3.1)	○	△	○	○	○	○		内 灰色 外 暗灰色	内 回転ヘラ削り 外 回転横ナデ		
43	3	SC024	坏身	(12.4)	(14.8)	-	○	△	○	○	○	○		内 灰色 外 灰黄色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ	赤色顔料付着	
43	4	SC024	坏身	11.0	(13)	-	○	△	○	○	○	○		暗灰色	内 回転ナデ 外 回転ナデ		
43	5	SC024	坏身	-	(13.0)	-	○	○	○	○	○	○		暗灰色	内外 回転横ナデ 回転横ナデ・回転ヘラ削り	受け部のみ	
43	6	SC024	坏身	-	-	-	○	△	○	○	○	○		内 灰色 外 灰黄色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ	ヘラ調整・ 回転器を打ち欠く	
43	7	SC024	甕	(19.0)	-	-	●	●	○	○	○	○	●	明褐色	内 横ナデ・ヘラケズリ 外 ハケ目横ナデ		
43	8	SC024	甕	(17.6)	-	-	●	●	○	○	○	○	●	明茶褐色	内外 横ナデ・ヘラケズリ 横ナデ・ナデ		
43	9	SC024	甕	-	-	-	●	●	○	○	○	○	●	明茶褐色	内外 横ナデ・ヘラケズリ ハケ目後ナデ		
43	10	SC024	甕	-	-	-	○	○	○	○	○	○		明黄褐色	内 ナデ 外 ナデ		
46	1	SC025	坏蓋	13.6	4.1	-	○						○	青灰色	内 回転ナデ・回転ヘラ削り 外 回転ナデ	肥手・ス付	
46	2	S033	坏蓋	12.4	4.2	-	○							青灰色	内 回転ナデ・回転ヘラ削り 外 回転ナデ	内面ヘラ記号	
46	3	S033	坏蓋	(13.4)	-	-	○							青灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ	ヘラ記号	
46	4	S033	甕	-	-	-	○							暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
46	5	S033	甕	-	-	-	●	●	○	○	○	○	○	茶褐色	内 横ナデ 外 横ナデ	赤色顔料付着	
46	6	S033	高坏	-	-	-	●	●	○	○	○	○	△	明褐色	内 ナデ 外 ナデ		
46	7	SC025	移動式 カマド	-	-	-	●	●	○	○	○	○	●	内 明茶褐色 外 黄褐色	内 ナデ調整 外 ナデ		
49	1	SK003	甕	(17.9~ 18.1)	-	-	○	△	○	○	○	○			内外		ヘラ記号
51	1	SP005	坏身	(12.2)	(14.4)	-	○	○	○	○	○	○		黄灰色	内外 回転横ナデ 外 回転横ナデ・回転ヘラ削り	自然軸	
一括	1	一括	坏身	-	-	-	○	○	○	○	○	○		黄灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
一括	2	一括	無蓋高坏	(13.0)	-	-	○	○	○	○	○	○		黄灰色	内外 回転横ナデ 外 回転横ナデ・波状文		
一括	3	一括	甕	-	-	-	○	○	○	○	○	○		内 黄灰色 外 暗灰色	内 回転横ナデ 外 回転横ナデ		
一括	4	一括	甕	(16.0)	-	-	△	△	○	○	○	○	△	明褐色	内外 横ナデ・ナデ 外 ハケ目後ナデ		
一括	5	一括	甕	(12.8)	-	-	●	●	○	○	○	○	●	灰褐色	内外 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・ナデ		
一括	6	一括	坏	(16.1)	-	-	●	●	○	○	○	○	△	淡褐色	内外 横ナデ・ナデ 外 横ナデ・ナデ		
一括	7	一括	移動式 カマド	-	-	-	●	●	○	○	○	○		明褐色	内外 ナデ ナデ		

第4表 出土石器類観察表

番号	出土位置	器種	材質	色調	外径・長さ (c.m)	断面径・高さ (c.m)	孔径(c.m)	重量(g)	備考
23	10SC008	紡錘車	緑泥片岩	濃紺	上部径 3.0 下部径 5.0	2.3	0.8	70.4	「メ」記号あり
43	12SC024	碧玉	碧玉	モスグリーン	2.3+α	1.1	0.2	4.9	

第5表 出土鉄器類観察表

番号	出土位置	器種	全長(c.m)	刃部長	刃部 幅(c.m) 厚(c.m)	柄部 幅(c.m) 厚(c.m)	竪部 径(c.m) 厚(c.m)	竪部 径(c.m) 厚(c.m)	重量(g)	備考
23	3SC011	鉄鏃	9.9	-	1.5 0.3	8.5 0.5	-	-	16.8	
24	3SC009	鉄鏃	7.3	-	2.9 0.2	4.4 0.5	-	-	13.7	
28	10SC011	刀子	4.2+α	4.2+α	-	-	-	-	7.1	

第6表 出土石器類観察表

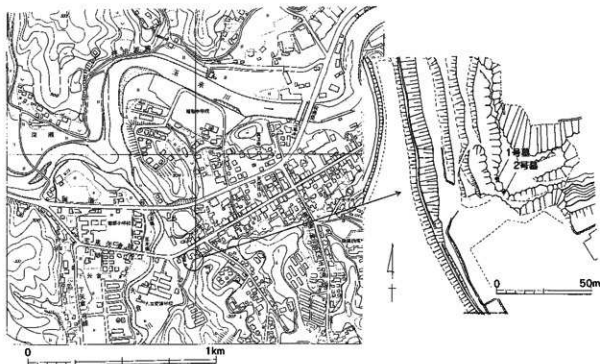
番号	出土位置	器種	法 量				石 材	備考	
			長さ(c.m)	幅(c.m)	厚さ(c.m)	重量(g)			
5	1	SC001	台形礮石器	3.5	2.5	0.6	6.6	硬質安山岩	
5	2	SC001	剥片	3.3	1.3	0.6	2.6	流紋岩	
5	3	SC016	ナイフ	2.5	2.5	0.9	3.6	腰岳産黒曜石	
5	4	SC004	石核	5.6	3.6	2.0	42.9	流紋岩	
5	5	SC004	剥片	2.1	2.7	1.6	2.9	チャート	
5	6	SC002	剥片	2.0	4.6	0.97	8.9	チャート	
5	7	SC003	スクレイパー	6.2	5.4	1.25	54.4	チャート	
5	8	SC002	剥片	4.6	2.9	1.0	14.9	流紋岩	
10	1	一括	クサビ形石器	3.2	1.8	1.05	5.4	姫島産黒曜石	
10	2	SP003	クサビ形石器	2.1	2.7	1.1	7.1	チャート	
10	3	SC008	織木製品	2.85	2.0	0.9	3.7	チャート	
10	4	SC005	剥片	2.7	1.95	0.4	2.3	姫島産黒曜石	
10	5	SC008	石筥	5.8	2.35	0.5	6.7	サヌカイト	
10	6	SC016	石核	3.0	4.0	1.9	21.3	サヌカイト	
10	7	一括	石核	4.0	6.3	2.7	67.1	流紋岩	
10	8	SC024	扁平打製石斧	8.2	4.0	1.1	46.1	緑泥片岩	
10	9	SC008	扁平打製石斧	8.1	7.4	0.9	67.6	輝石安山岩	
10	10	SC020	磨製石斧	7.8	7.5	1.6	140.2	硬質砂岩	
10	11	SC003	磯部・蔽石	8.1	6.15	4.35	330.2	硬質砂岩	
11	12	SD001	磨石・蔽石	10.1	8.6	3.8	433.8	安山岩	
11	13	一括	磨石・蔽石	7.9	5.0	5.0	319.4	安山岩	
11	14	SC002	磨石・蔽石	12.5	13.0	8.0	1400.0	安山岩	
11	15	SC002	磨石	8.2	6.2	4.8	283.4	安山岩	
11	16	SC003	磨石	4.6	4.7	3.9	118.4	安山岩	
11	17	SC007	磨石・蔽石	12.0	9.2	6.1	914.0	安山岩	
11	18	SC007	磨石・蔽石	7.3	7.0+α	3.7	261.6	安山岩	
11	19	SC008	磨石・蔽石	7.8	10.8	5.5	465.9	安山岩	
11	20	SK001	磨石・蔽石	13.5	7.9	4.5	662.7	安山岩	
11	21	SC023	磨石・蔽石	14.8	10.86	6.7	1198.1	安山岩	
12	22	一括	磨石・蔽石	9.0	9.1	6.2	774.9	安山岩	
12	23	SC009	磨石・蔽石	21.5	13.5	7.2	2100.0	安山岩	
12	24	SC008	磨石・蔽石	-	-	5.1	372.3	安山岩	
12	25	一括	磨石・蔽石	7.0	6.9	4.3	269.3	安山岩	
12	26	SC020	磨石・蔽石	11.2	11.2	4.75	843.7	安山岩	
12	27	SC008	砥石	9.1	5.2	3.8	305.7	結晶片岩	
12	28	SK002	砥石	15.1	5.0	3.7	466.9	結核岩	

付 篇

玉来横穴墓群について

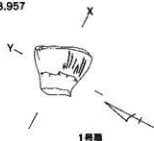
1 はじめに

玉来横穴墓群は、大分県竹田市大字玉来に所在し、玉来川の支流である矢倉川の右岸、標高約280mに位置する。県道高森竹田線道路改良工事に伴う分布調査の際に、1基の半壊した横穴墓を確認したため、県竹田土木事務所と協議し立会調査を実施することとなった。調査は平成17年11月24日に実施し、2基の横穴墓を確認したが、これらの横穴墓は、後世の開発等で既に前庭部や羨道部は消滅し、玄室も半壊状態であった。そのため、立会い調査終了後、遺構実測及び写真実測を行い玉来横穴墓の調査を終了した。これらの横穴墓からは遺物は出土していないため、造墓時期については明らかにできなかった。



第1図玉来横穴墓群位置図及び周辺地形図 (1/1000・1/10000)

(X=5711.962
Y=34948.957)



1号墓

(X=5708.502
Y=34946.932)



2号墓

0 2.5m

282,000m

281,500m

281,000m

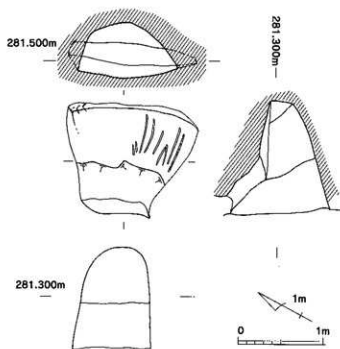
280,500m

280,000m



第2図玉来横穴墓群造営遺構配置図 (1/400)

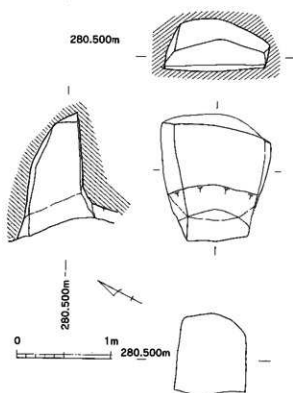
2 遺構について



第3図玉来横穴墓群1号墓実測図 (1/40)

1号横穴墓

調査区北側の横穴墓である。前底部・羨道部ともに消滅し、玄室も半壊状態のためその規模は明らかでないが、玄室の長さは現状で0.65m、幅は奥壁付近で最大となり役1.55mを測る。妻入り隅丸方形の逆台形型で、床面中央がやや窪む。天井はアーチ型で高さは床面からの高さは0.55mを測る。奥壁は短くほぼ垂直に立ち上がる



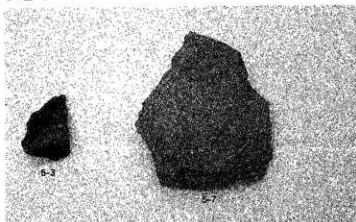
第4図玉来横穴墓2号実測図 (1/40)

2号横穴墓

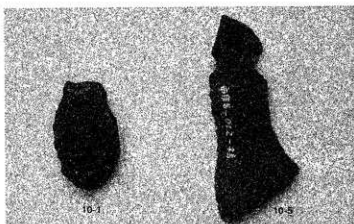
1号墓の南に位置する。1号墓同様玄室が半壊状態で検出した。玄室の長さは現状で0.75m、幅は奥壁付近で最大となり役1.15mを測る。妻入り隅丸方形の逆台形型で、天井はアーチ型、床面からの高さは0.55mを測る。奥壁はなだらかに内側へ傾斜しながら立ち上がる。



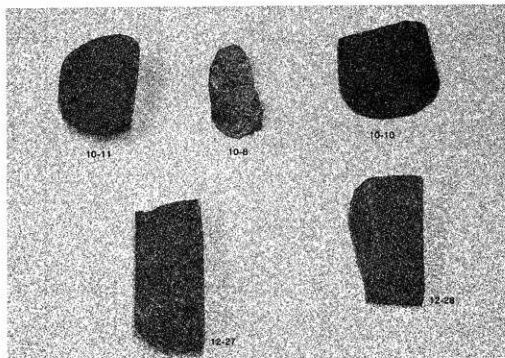
PL 1



ナイフ形石器・スクレイパー

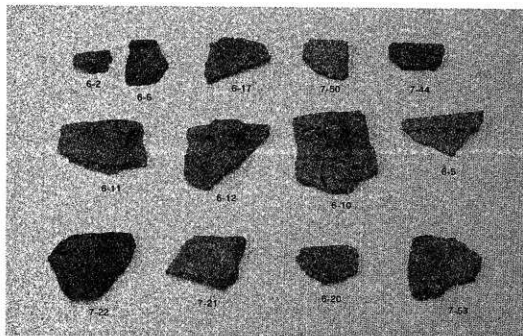


角錐状石器・石匙



打製石斧・磨製石斧・砥石

市用遺跡出土石器

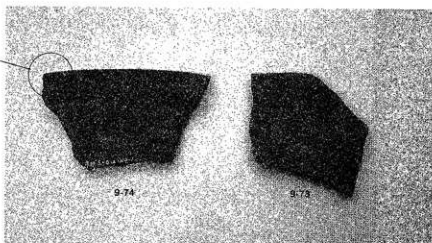


磨消縄文土器類

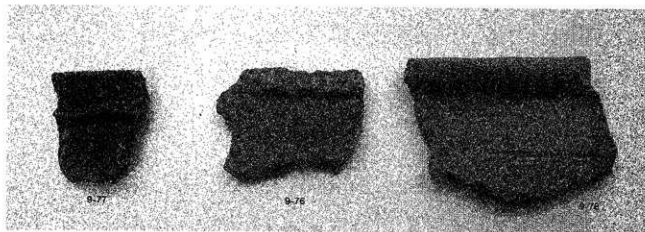


土器類

穀物類の圧痕



黒色磨研土器類

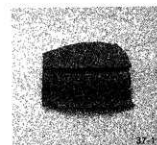
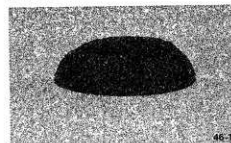
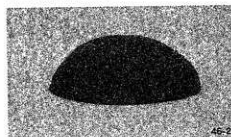
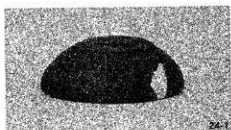


(下城系土器・刻目突帯文土器・肥後系土器)

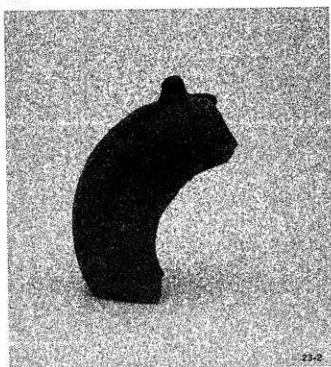
市用遺跡出土縄文・弥生土器

PL3

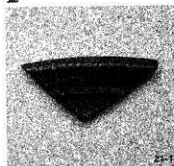
坏類



埴瓶



甕

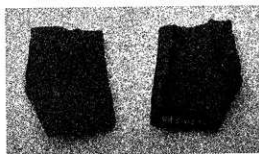


高坏



すかし入り1

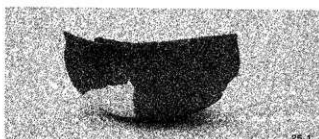
すかし入り2



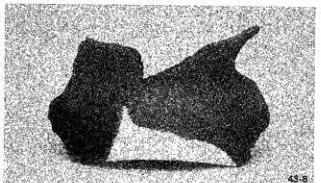
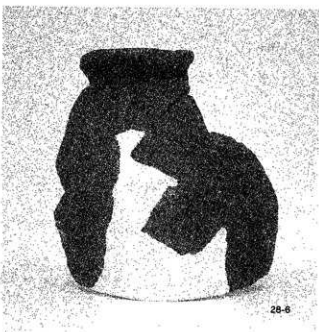
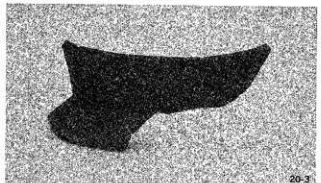
市用遺跡出土須恵器

PL4

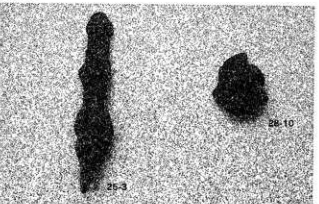
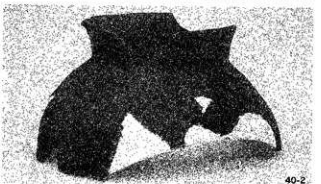
鉢



甕



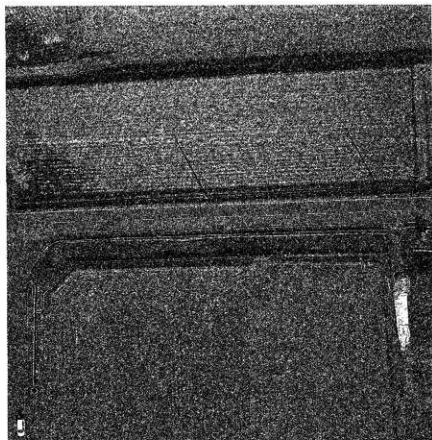
鉄器類



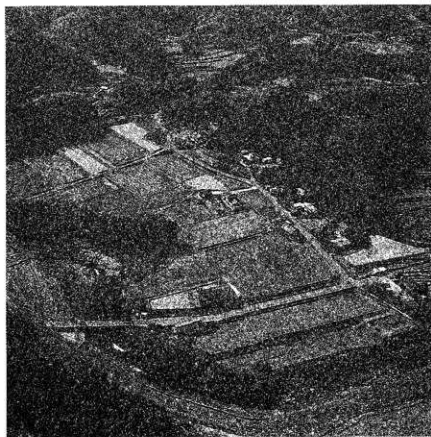
市用遺跡出土土師器・鉄器

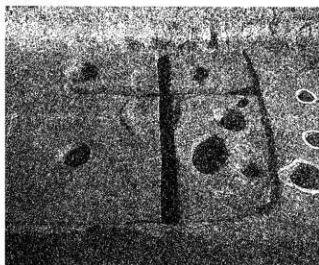
PL5

市用遺跡全景 1

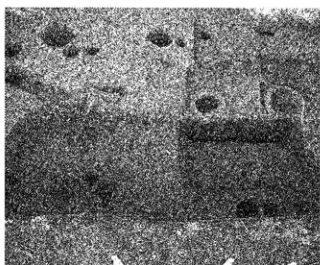


市用遺跡全景 2

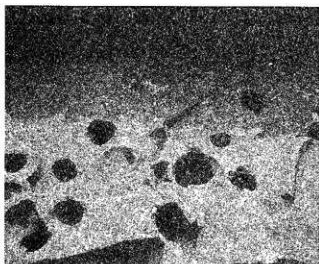




SC001 完掘状況



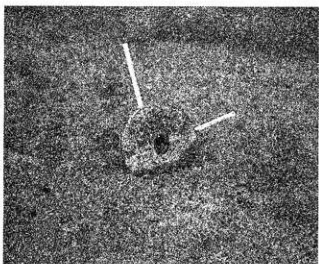
SC002・003 巻掘状況



SC004・005・006 完掘状況



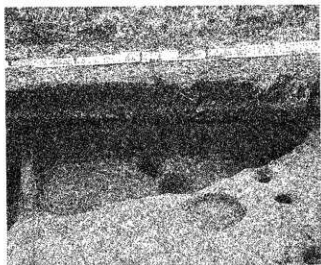
SC009・010・016 遺物出土状況



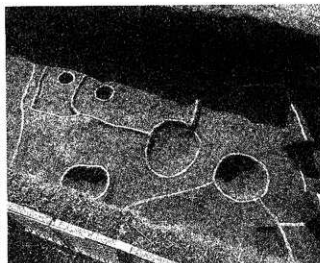
SC009 遺物出土状況



SC009 遺物出土状況



SC020 完掘状況



SC011~013・017~019 完掘状況



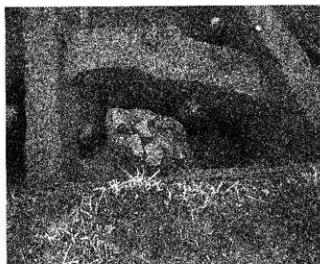
SC011 カマド検出状況1



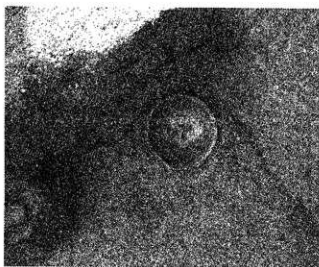
SC011 カマド検出状況2



SC011 カマド検出状況3



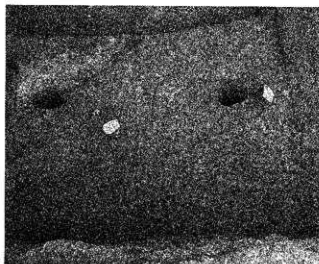
SC019 集積遺構検出状況



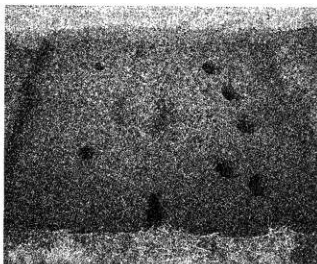
SC022 遺物出土状況 1



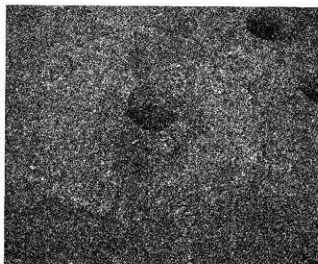
SC022 遺物出土状況 2



SC023 完掘状況



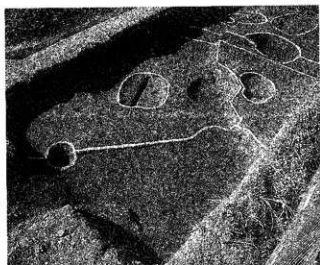
SC024 完掘状況



SC024 中央土坑検出状況



SC024 遺物出土状況



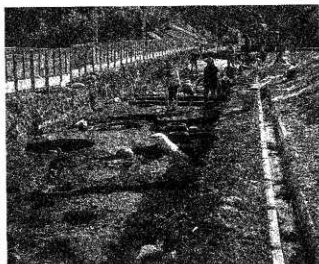
SC025・026 完掘状況



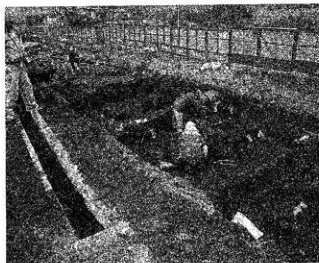
SC025 カマド検出状況



SK003 遺物出土状況



作業風景 1



作業風景 2



調査に参加されたみなさん

フリガナ	イチモチイセキ
書名	市用遺跡
副書名	黒道白丹竹田線道路改良工事に伴う関係埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第19輯
シリーズ名	大分県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	-
編著者	甲斐寿義
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分県大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
発行年月日	2007年3月30日

フリガナ 所収遺跡名	ショザイチ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イチモチイセキ 市用遺跡	タケノコシホアザイチモチ 竹田市大字市用	539	162	32°58'16"	131°20'57"	2005.11.1~ 2006.1.12	500㎡	道路 改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市用遺跡	集落跡	古墳時代 縄文・弥生時代 旧石器時代	竪穴遺構 土坑 溝状遺構	土師器 須恵器 鉄器 石製品 縄文土器・弥生土器 石器	

遺跡の概要

市用遺跡は大分県竹田市大字市用に所在する、古墳時代後期の集落を中心とした遺跡である。今回の調査では、6世紀前半から7世紀初頭頃の竪穴遺構26基、土坑6基やそれに伴う須恵器、土師器などの遺物を検出した。この時期は隣接する市用横穴墓群の造墓時期と重なっていることからその関係が注目される。その他の遺構としては、近世の水田に伴うと思われる溝状遺構が2条検出している。また、今回検出した遺構からは、旧石器時代の石器や、縄文時代後期の磨消縄文土器を中心とした土器や石器、弥生時代の土器等が出土し、この一帯の生活の営みが旧石器時代まで遡ることが明らかとなった。

市 用 遺 跡

— 県道白丹竹田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —
大分県教育庁埋蔵文化財センター文化財調査報告書第19編

編 集 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ピワノ門1977番地
TEL(097)597-5675
発 行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ピワノ門1977番地
TEL(097)597-5675

印刷 極東印刷紙工株式会社
